岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第677集

八幡沖遺跡発掘調査報告書

地域連携道路整備事業折壁地区室根バイパス関連遺跡発掘調査

２０１８

岩手県県南広域振興局土木部一関土木センター
（公財）岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第677集
八幡沖遺跡発掘調査報告書
２０１８
（公財）岩手県文化振興事業団

八幡沖遺跡発掘調査報告書

地域連携道路整備事業折壁地区室根バイパス関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史を生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは、県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、地域連携道路整備事業(折壁地区室根バイパス)に関連して、平成26～28年度に発掘調査された八幡沖遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。今回の調査により、縄文時代は陥し穴を設置した狩猟場であったことや、中～近世には大規模な堀状遺構による鉱物資源の採取場として使用されていた可能性があり、遺跡の内容やこの地域を理解する上でも大きな成果を得ることができたと言えます。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました県南広域振興局土木部一関土木センター、一関市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成30年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　菅野洋樹

例　　言

1　本報告書は、岩手県一関市室根町折壁字八幡沖・向山地内に所在する八幡沖遺跡の発掘調査成果を収録したものである。

2　本遺跡の調査は、地域連携道路整備事業折壁地区室根バイパスに伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県県南広域振興局土木部一関土木センターと岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、岩手県県南広域振興局土木部一関土木センターの委託を受けた公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3　岩手県遺跡台帳における遺跡番号と今回の調査における遺跡略号は以下のとおりである。

遺跡番号…ＮＦ93－1069　遺跡略号…ＨＯ－14・15・16

4　発掘調査期間・面積・担当者は以下のとおりである。

平成26年度－調査期間：平成26年９月16日～12月19日　面積：5,110㎡
担 当 者：杉沢昭太郎・中川重紀・鈴木貞行・白戸このみ

平成27年度－調査期間：平成27年７月１日～11月26日　面積：8,313㎡
担 当 者：小林弘卓・近藤行仁・藤本玲子・鈴木貞行・
清水彩・佐藤奈津季・宇部めぐみ

平成28年度－調査期間：平成28年６月１日～８月５日　面積：1,450㎡
担 当 者：小林弘卓・鈴木貞行・久保友咲

5　室内整理期間は以下のとおりである。

平成26年度：平成26年12月１日～平成27年３月31日
平成27年度：平成27年12月１日～平成28年３月31日
平成28年度：平成28年12月１日～平成29年３月31日

6　報告書の執筆は、第Ⅰ章を県南広域振興局土木部一関土木センター、第Ⅱ・Ⅲ章を杉沢、Ⅳ章を杉沢・小林・鈴木、Ⅴ・Ⅵ章を杉沢・小林が担当した。なお、Ⅳ章については、調査進構担当者による分担執筆とし、文末に名前を付した。本書の構成・編集は杉沢・小林が行った。

7　野外調査における委託業務は以下のとおりである。

基準点測量：両磐測量設計（平成26年度）、（株）総合土木コンサルタンツ（平成27年度）
ＵＡＶ地形測量：北栄調査設計（株）
航空写真撮影：東邦航空（株）

8　試料の分析・鑑定は次の機関に依頼した。

石質鑑定：花崗岩研究会

9　普及活動として、以下のものを行った。

平成26年度文化史講座「八幡沖遺跡」／一関市立室根公民館／平成27年１月26日
現地公開／平成28年７月24日

10　今回の発掘調査で出土した遺物と諸記録は、全て岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

11　本遺跡の調査成果は、既に当センターのホームページ、現地公開資料、調査概報等で公表しているが、記載が異なる場合は本書の報告内容がすべてに優先する。

凡　例

1　遺構実測図の縮尺は以下のとおりで、一部異なるものは各図にスケールと縮尺を付した。
　土坑・陥し穴…1/40
　溝跡・堀状遺構…平面：1/100、断面1/50または適宜
2　層位は基本層序にはローマ数字を、遺構の埋土にはアラビア数字を用いた。
3　遺構図版中の石器および礫は「S」と表記した。なお、土層断面図内の「K」は撹乱を表す。
4　各遺物の縮尺は原則以下のとおりである。なお、紙幅の制約上、これに依らないものについては、個々にスケールを付した。
　陶磁器・銭貨・土器・石器類…1/2
5　遺構図版及び遺物図版中に網掛け・塗りをしている範囲については、個々に凡例を付している。
6　土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に基づいている。
7　国土地理院発行の地形図を掲載したものには、図中に図幅名と縮尺を付した。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　立地と環境
1　遺跡の位置……1
2　地形・地質……3
3　周辺の遺跡……4

Ⅲ　調査・整理の方法
1　野外調査……6
（1）調査区の設定と遺構の命名……6
（2）試掘・表土除去・遺構検出と精査……6
（3）実測・写真撮影……7
2　室内整理……7
（1）遺構図面の整理……7
（2）遺物の整理……7
（3）写真撮影と整理……7

Ⅳ　検出された遺構
1　遺跡の概観……9
2　調査の概要……9
（1）各年度の調査概要……9
（2）基本層序……10
3　検出遺構……10
（1）土　　坑……10
（2）陥し穴……13
（3）溝　　跡……21
（4）堀状遺構……23

Ⅴ　出土遺物……45

Ⅵ　総　　括
1　陥し穴について……46
2　中～近世について……47

報告書抄録……75

図版目次

第１図　遺跡位置図…… 2
第２図　地形分類図…… 3
第３図　周辺の遺跡図…… 4
第４図　調査範囲図…… 8
第５図　遺構配置図①…… 25
第６図　遺構配置図②…… 26
第７図　遺構配置図③…… 27
第８図　ＳＫ01・02・05・06土坑…… 28
第９図　ＳＫ07・08・10・11土坑…… 29
第10図　ＳＫ12・13・19・22・26土坑…… 30
第11図　ＳＶ01～06陥し穴…… 31
第12図　ＳＶ07～12陥し穴…… 32
第13図　ＳＶ13～17陥し穴…… 33
第14図　ＳＶ19・21～23陥し穴…… 34
第15図　ＳＶ24～28陥し穴…… 35
第16図　ＳＶ29～32陥し穴…… 36
第17図　ＳＶ33～35陥し穴、ＳＤ01・02溝跡…… 37
第18図　ＳＤ03～05溝跡…… 38
第19図　ＳＤ06・08・09溝跡…… 39
第20図　１・２号堀状遺構…… 40
第21図　３号堀状遺構（１）…… 41
第22図　３号堀状遺構（２）…… 42
第23図　４号堀状遺構（１）…… 43
第24図　４号堀状遺構（２）…… 44

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表…… 5
第２表　遺構一覧表…… 24
第３表　遺物観察表…… 45

写真図版目次

写真図版１　航空写真（１）…… 51
写真図版２　航空写真（２）、調査区現況…… 52
写真図版３　土坑（１）…… 53
写真図版４　土坑（２）…… 54
写真図版５　土坑（３）…… 55
写真図版６　土坑（４）、陥し穴（１）…… 56
写真図版７　陥し穴（２）…… 57
写真図版８　陥し穴（３）…… 58
写真図版９　陥し穴（４）…… 59
写真図版10　陥し穴（５）…… 60
写真図版11　陥し穴（６）…… 61
写真図版12　陥し穴（７）…… 62
写真図版13　陥し穴（８）…… 63
写真図版14　陥し穴（９）、溝跡（１）…… 64
写真図版15　溝跡（２）…… 65
写真図版16　溝跡（３）…… 66
写真図版17　溝跡（４）、堀状遺構（１）…… 67
写真図版18　堀状遺構（２）…… 68
写真図版19　堀状遺構（３）…… 69
写真図版20　堀状遺構（４）…… 70
写真図版21　堀状遺構（５）…… 71
写真図版22　出土遺物（１）…… 72
写真図版23　出土遺物（２）…… 73
写真図版24　出土遺物（３）…… 74

Ⅰ　調査に至る経過

八幡沖遺跡は、「地域連携道路整備事業一般国道284号室根バイパス」工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道284号は、岩手県陸前高田市を起点とし、宮城県気仙沼市を経由して岩手県一関市に至る総延長約62kmの幹線道路である。本路線は、災害時の緊急輸送道路に指定されており、平成23年３月11日の東日本大震災津波の際も、被災者の救出、救援物資の輸送等に大きな役割を果たした。平成23年８月には、岩手県東日本大震災津波復興実施計画において復興支援道路に位置づけて重点的に整備を行っている。

事業対象箇所の一関市室根町の中心市街地は、幅員狭小、線形不良等により大型車の通行に支障をきたしており、またＪＲ大船渡線のガード下の高さ制限や踏切による渋滞の発生等、安全で円滑な通行が確保されていないことから、これらの諸問題を解決するため、バイパス工事により整備を行っているものである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局土木部一関土木センターから平成25年２月14日付け一土セ第761号「埋蔵文化財の試掘調査について(依頼)」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成25年２月27日から同年２月28日にかけて試掘調査を実施し、工事に着手するためには当該遺跡の発掘調査が必要となる旨を、平成25年３月19日付け教生第1735号「埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」により当センターへ回答してきた。

その結果を踏まえて当センターは、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成26年８月29日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(岩手県県南広域振興局土木部一関土木センター)

Ⅱ　立地と環境

１　遺跡の位置

八幡沖遺跡のある一関市室根町は岩手県内陸部の南東端、北上山地の南端近くに位置する。一関市は北を奥州市と平泉町、南を宮城県に囲まれる本県では最も南に位置する自治体である。

室根町内を大川が宮城県気仙沼市に向かって、津谷川が宮城県本吉方面へと流れている。大川流域には常住から矢越地区、折壁地区、浜横沢地区が、津谷川流域には津谷川地区がある。

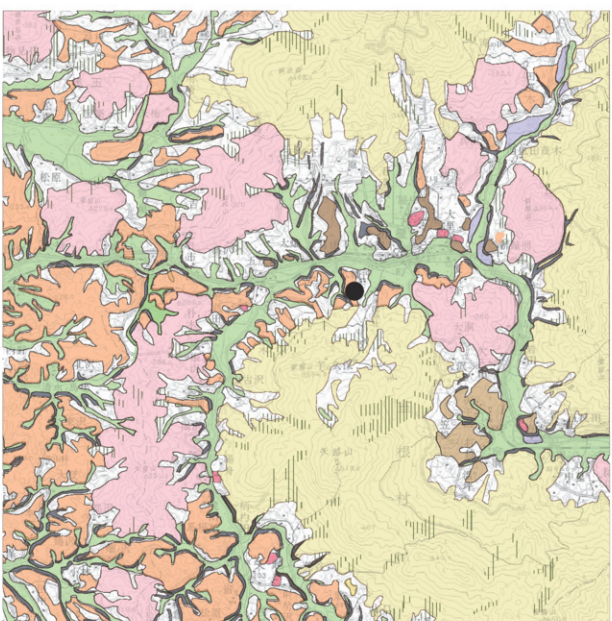
八幡沖遺跡は北緯38度55分58秒、東経141度26分29秒周辺に位置しており標高は180mほどである。現況は山林になっている。遺跡周辺には金鶏城、折壁城など中世城館が分布する場所である。

第１図　遺跡位置図

2　地形・地質

ここでは、報告遺跡がある一関市室根町及びその周辺の地理的環境について述べる。

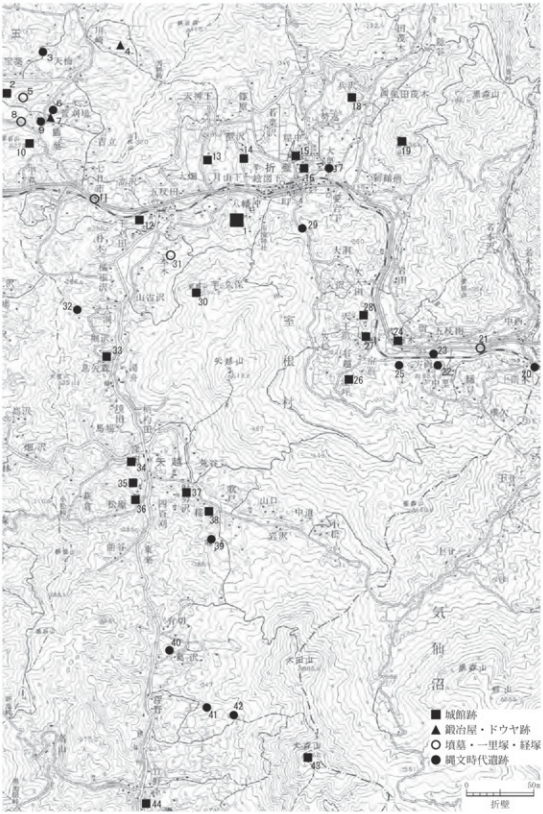
北上川水系の視点から見ると、一関市は北上川中流域の南端に位置する。しかし一関市室根町だけは北上川水系には属していない。北上川の東側は、河岸低地とその東側の山や丘が連なる丘陵地帯から成り、それらの丘陵地帯は第三紀層に相当する北上山系である。河岸低地から丘陵地帯へ急激に標高が高くなるような地形になっている。室根町域は北上山系の南端部に位置し、大川水系及び津谷川水系からなる。両水系とも太平洋までの距離が短く、流域にはあまり平野も発達していないのが特徴といえる。



第２図　地形分類図

3 周辺の遺跡

今回調査した八幡沖遺跡の周辺の遺跡については、以下の第３図及び第１表にまとめた。



第３図　周辺の遺跡図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	種　別	時　代	主な遺構・遺物	備　考
1	八幡神	狩猟場	縄文・中～近世	縄文土器、陥し穴、墓壙、堀状遺構	本報告
2	此ノ手館	城館跡	中世?		
3	宝築	散布地	縄文	縄文土器破片	
4	天梅堀屋敷跡※	ドウヤ跡	近世	鉄滓	遺跡台帳登録上は「堀屋敷」誤字か?
5	行人塚	墳墓	?		
6	笠刈場Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器、チップ、石器、住居跡	H15新規、H16・17年度試掘調査
7	鍛冶屋	屋敷・工場跡	近世?	鉄滓	H15新規
8	行人塚	墳墓?	?		
9	笠刈場Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、チップ	H15新規
10	殿金沢館跡	城館跡	中近世		
11	七日市一里塚	一里塚	近世		村指定史跡、１基のみ
12	上折壁城 (山吹城、旭館)	城館跡	中世	本丸、二の丸、空堀	S59試掘調査、市指定史跡
13	中館	城館跡	中世		現在屋敷地
14	金蔵城 (曲館、西城、下折壁城)	城館跡	中世	本丸、二の丸、空堀、帯郭	市指定史跡
15	折壁城(真山屋敷)	城館跡	近世		
16	要害館	城館跡	中世		遺構なし
17	旧折壁中学校	散布地	縄文	縄文、石器、土器	
18	久保館	城館跡	中世		遺構なし
19	新館	城館跡	中世	土壇が二段	山頂が城跡、神社あり
20	澄川	散布地	縄文	縄文土器、石器	H13新規
21	中西一里塚	一里塚	近世		市指定史跡、１基のみ 旧3五反田一里塚より名称変更
22	方洞	散布地	縄文	石器、縄文土器	畑地
23	石神	散布地	縄文	縄文土器、石神あり	
24	梅木城	城館跡	中世		
25	七宝山	散布地	縄文	石器、縄文土器	
26	向館	城館跡	中世		独立した山全体が館跡、遺構なし
27	浜横沢城	城館跡	中世	本丸、二の丸、堀	H12一部発掘調査、 「浜横沢城跡発掘調査概報」室根村教委 発掘調査成果から縄文土器や土師器?も出土
28	北館	城館跡	中世		現在雑木山、遺構なし
29	向山	散布地	縄文	縄文土器	畑地
30	新館山城(要害館)	城館跡	中世		
31	二本木経塚	経塚	近世		小山の中腹
32	堀沢	散布地	縄文	縄文、石器、土器	畑地
33	児屋館(鳥矢館)	城館跡	中世	本丸、土壇、腰郭	H12公家館(№93-0280)を統合
34	矢越古館	城館跡	中世	本丸、二の丸、平場	
35	饗町城(乍舞館)	城館跡	中世	土郭、二重堀、帯郭	
36	朝日館	城館跡	中世	堀切、平場	八郎右ェ門神社あり
37	柴股城 (釘小木丸館・要害館)	城館跡	中世	本丸、二の丸、内堤、外堤、空堀、帯郭	丘全体が城館
38	行者館	城館跡	中世		遺構なし
39	大峰	散布地	縄文	縄文土器	
40	有切	散布地	縄文	縄文土器、石器	畑地
41	刈谷野	散布地	縄文	縄文土器、石器	畑地
42	浮野	散布地	縄文	縄文土器、石器	畑地
43	大森山館	城館跡	中世		山頂が館跡、遺構なし
44	津谷川城	城館跡	中世	本丸、二の丸、二段の壇	

Ⅲ　調査・整理の方法

1　野　外　調　査

(1)調査区の設定と遺構の命名

八幡沖遺跡は調査対象面積が14,873㎡と広いが、地形としては中央部の谷部を挟んで東西ふたつの尾根部に区分できる。地区割はこれを利用し、東尾根部、西尾根部と中央谷部と大まかに三区分し、さらに各区域ごとに、東尾根部○○側というように方位を入れて細区分をした。遺構外出土遺物の取り上げについても、平面的な位置の記載にはこれを用いた。

各区域には、平面直角座標第Ⅹ系(世界測地系)に合わせた基準点を設け、遺構実測や地形測量に利用した。打設した基準点と座標値は第４図に示した。なお、今回の調査では、遺跡の内容から鑑みてグリッド設定は特に行っておらず、各遺構図には平面直角座標第Ⅹ系の座標値を記した。

検出された遺構の名称は、遺構の種類に応じてアルファベットで略号化し、検出順にそれぞれ番号を付した。今回使用した遺構種と略号は以下のとおりである。

土坑…ＳＫ　陥し穴…ＳＶ　溝跡…ＳＤ　　例：ＳＫ01、ＳＶ02…など

このほか、溝跡(ＳＤ)と区別するために、形状は類似するが、規模が大きな溝を堀状遺構と命名した。これらについては、略号化せず、○号堀状遺構と番号を付してそのまま用いた。

精査の過程や終了後に検討した結果、遺構ではないと判断したものや、遺構の種類を変更した番号については、混乱を防止するために欠番扱いとした。なお、調査時と本報告において生じた遺構名の変遷については、第２表にまとめて記してある。

(2)試掘・表土除去・遺構検出と精査

調査開始段階で、調査区域内には樹木伐採で発生した雑物が大量に残されていた。これらを重機と人力で集めて調査区外へと搬出する作業から取り掛かった。遺跡を覆っていた大量の雑物を取り除くことによって遺跡に残された人為的な痕跡が複数確認され、それに基づいて発掘調査計画を立てることが可能となった。

通常の発掘調査の中で行われるような試掘を調査開始と共に適宜行った。人力による粗掘りを行い、遺構検出面の状況、遺物包含層の有無などを確認した。その場所へすぐに重機を入れて表土掘削を開始した。その間に別の地点で人力による試掘を行い、遺構検出面までの深さ、遺物出土状況を把握し、重機掘削に備えた。

重機による表土剥ぎが終わった場所では人力によって遺構検出を行った。可能な限り遺構外出土遺物を採取することに努め、遺構の検出は、所謂地山面を基本としながらも各土層でも適宜行った。

検出された遺構は、４分法・２分法といった基本通りに調査を行っている(主に土坑・陥し穴類)。堀状遺構や溝跡では１本ないしそれ以上の土層断面観察・実測用のベルトを設けて作業した。そして精査の各段階において必要な図面の作成や写真撮影を適宜行った。

遺構内出土の遺物は、埋土で可能な限り分層して取り上げ、底面出土や残存状態の良い遺物は写真撮影・図面作成後に取り上げた。遺構外出土の遺物については、原則として調査区ごとに出土した層位を記して取り上げ、状態の良いものは写真撮影・図面作成を行った。

また、現場での記録作成では、上記の図面・写真以外にフィールドカードを使用して、遺跡の調査

経過や遺構の精査の進捗状況を記録している。

（3）実測・写真撮影

平面実測は電子平板（遺構くん／㈱ＣＵＢＩＣ）を使用し、デジタルデータ化した。断面実測については、任意の高さを基に設定した水糸を基準として計測を行い、縮尺1/20または1/10の手書き実測図とした。

写真撮影は、６×９判モノクロームフィルムカメラ（FUJI GSW690Ⅲ）１台とデジタル一眼レフカメラ（Canon EOS 5D MarkⅡ）１台を使用したが、後者のみですべてを賄った遺構もある。撮影に際しては、整理時の混乱を避けるために撮影カードを使用した。実際の撮影は各種遺構の覆土堆積状況、掘り上げ状況、遺物の出土状況などについて行っている。調査終了段階では、平成26年度はセスナ飛行機による写真撮影、平成28年度はＵＡＶ地形測量と併せて空中写真撮影を行っている。

２　室　内　整　理

（1）遺構図面の整理

実測図は遺構ごとに分類し、図面は点検のうえ、デジタルトレースを行った。電子平板で測量したデータについては、現場で計測した情報をそのまま保存することとし、編集用データは、手実測で記録したその他の実測図と合成し、遺構図版を作成している。

（2）遺 物 の 整 理

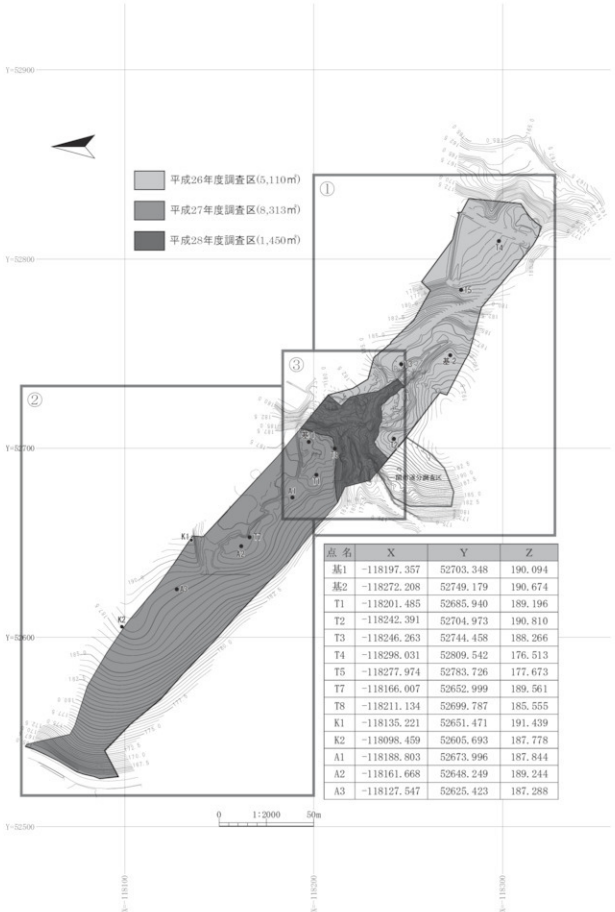
出土した遺物は、まず種類別（土器、陶磁器、石器、古銭）に分類し、取り上げた遺物収納袋ごとに重量計測を行った。その後、遺物別に註記・接合作業を経て、本書掲載分と不掲載分を選択、掲載分は種類毎に仮番号を付して登録作業を行った。この後、それぞれの実測・拓本、点検・修正、トレースを行い、それらをスキャナーで取り込んでデジタルデータとし編集・整理した。仮番号は、最終的に遺構内の遺物から掲載番号（算用数字の連番）に付け替えている。

本書への掲載にあたっては、遺構内出土の遺物を優先して選び、表土層や撹乱からのものは基本的に不掲載としているが、これにあたらないものもある。

（3）写真撮影と整理

野外調査時の遺構写真等は、６×4.5判モノクローム写真はネガとともにアルバムに貼付し、デジタルカメラで撮影したデータは、各遺跡、各遺構ごとに個別のフォルダーにまとめた。

遺物の写真は、当センター写真室において撮影技師がデジタル一眼レフカメラ（Canon EOS5D MarkⅡ）を使用し撮影した。



点名	X	Y	Z
基1	−118197.357	52703.348	190.094
基2	−118272.208	52749.179	190.674
T1	−118201.485	52685.940	189.196
T2	−118242.391	52704.973	190.810
T3	−118246.263	52744.458	188.266
T4	−118298.031	52809.542	176.513
T5	−118277.974	52783.726	177.673
T7	−118166.007	52652.999	189.561
T8	−118211.134	52699.787	185.555
K1	−118135.221	52651.471	191.439
K2	−118098.459	52605.693	187.778
A1	−118188.803	52673.996	187.844
A2	−118161.668	52648.249	189.244
A3	−118127.547	52625.423	187.288

第４図　調査範囲図

Ⅳ　検出された遺構

1　遺跡の概観

八幡沖遺跡は、一関市室根町折壁字八幡沖・向山地内に所在し、ＪＲ東日本折壁駅から約１㎞南西に位置し、矢越山と新館山から北に張り出す細長い尾根上に立地している。この尾根は町内を東流する大川の近くまで張り出しており、当該地域である折壁地区を一望することができる。遺跡全体の範囲は、東西約70m、南北400mと広く、現況の大半は杉林となっている。今回の調査区は遺跡の南東部分にあたり、標高は170～190m台である。

2　調査の概要

(1)各年度の調査概要

今回の調査は平成26～28年と３か年にわたり、合計14,873㎡を対象に行った。平成26年度は東側の尾根部5,110㎡、平成27年度は西側の尾根部8,313㎡、平成28年度はこれら２つの尾根の合間の谷部1,450㎡を対象とした(第４図参照)。

平成26年度は、９月16日から調査を開始した。調査区内には伐採時の雑物や草が生い茂っていたため、まずはこれを撤去する作業から取り掛かった。作業員も当初は５～６名と少数であったため、重機を併用して行った。10月８日、予想以上に雑物が多いことから、ある程度片付いた区域から人力トレンチによる試掘を開始。重機による雑物撤去は以後も続き、完全に終了したのは10月20日のことであった。トレンチにより状況が把握できたことから、10月27日、東側から重機による表土除去を開始。並行して遺構検出を行った。11月４日、遺構精査を開始。重機による表土除去を追いかけるかたちで西側へと調査を進めていった。12月に入り、気温も低く、天候も不順な日が続く。降雪の中、調査区西側の高位面にある陥し穴の精査に難航したものの、12月19日に当年度の調査を終了した。

平成27年度は、７月１日から調査を開始した。前年度と谷を隔てた西側の尾根である。前年度より起伏は少なく、見通しの良い尾根の頂部部分にあたる。前年度同様、伐採後の雑物撤去から着手した。重機も併用したが、面積も広大なため、８月５日まで時間を要した。その後、トレンチ試掘を行った。その結果、検出面までの層厚が東側は薄く、西側が厚いことが判明したため、東側は人力、西側は重機で表土除去を行うこととした。東側では土坑・陥し穴といった遺構が検出されてきたことから、８月24日より精査を開始。西側では依然として重機による表土除去が続き、尾根全体の表土除去は10月５日に完了した。遺構検出・精査はそのまま西側へと進んだ。10月６日、併せて中央谷部分北側の試掘にも着手した。試掘の結果、谷間には二重の堀跡(※当初は中世城館の堀跡と認識、詳細は後述する)が確認された。覆土が３mを超すため、途中まで重機で掘削することとした。10月19日より、重機掘削後の堀跡の精査に着手、一方尾根部においても陥し穴が増加しており、谷部と尾根部の二手に分かれて精査を行った。堀跡の土量は予想以上に膨大で、残り期間では完掘には至らないことが明らかとなったため、次年度に調査を継続し、崩落等の恐れのない適度な部分で止めることとした。重機による堀跡の掘削は11月13日で終了。その後は精査と尾根部の土坑・陥し穴の精査に集中。11月25日に精査を終え、翌日撤収し、当年度の調査を終了した。

平成28年度は、６月１日より調査を開始した。過年度の残りとなる中央谷部の南側を対象とした。早速翌日より、前年度からの続きとなる堀跡の精査を開始。重機による掘削も６月６日から行った。

以後、北側へと進行した。一時、土捨て場の確保がままならず、調査区域外への搬出に手間取ったが、そのほか大きな支障もなく、順調に調査は進んだ。７月24日には、３か年分の成果として、現地公開を開催し、地元住民の方々を中心にご参加いただいた。参加者は約90名。８月２日、ＵＡＶ地形測量と写真撮影を行い、同日資材を搬出し、調査を終了した。

（2）基　本　層　序

本調査区の基本層序は、尾根上と尾根裾では層厚の異なりや二次堆積による細分が見られるが、基本的には以下のとおりと判断できる。

Ⅰａ層…黒褐色土～暗褐色土：現在の表土。層厚約20～50㎝。撹乱も多い。低位部では薄い。
Ⅰｂ層…褐色土～黄褐色土：近現代の盛土層。畑作時のものか。西側尾根部の一部にのみ存在。層厚０～100㎝。
Ⅱ　層…黒色土～黒褐色土：旧表土と考えられ、高い面の一部に残存する。層厚０～20㎝。
Ⅲ　層…黄褐色土～黄橙色土：遺構検出面。地山。マサ土。部分的に風化が未進行な花崗岩石が見られる。

3　検　出　遺　構

今回の調査で確認された遺構は、土坑（ＳＫ）13基、陥し穴（ＳＶ）33基、溝跡（ＳＤ）８条、堀状遺構４条である。以下、遺構種別ごとに事実記載をする。

（1）土　　坑

ＳＫ01土坑（第８図、写真図版３）
＜位置・検出状況＞東側尾根部中央の高位部平坦面に位置し、Ⅲ層面で検出。
＜平面形・規模＞開口部180×110㎝の長方形。東側は撹乱痕によって切られる。
＜壁・底面＞壁はほぼ直立し、深さは最深部で60㎝を測る。底面は平坦である。
＜埋土＞３層に細分。地山ブロックを多く含む人為堆積と判断。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞不明。

（杉沢）

ＳＫ02土坑（第８図、写真図版３）
＜位置・検出状況＞東側尾根部西側の高位部斜面に位置し、Ⅲ層面で検出。
＜平面形・規模＞開口部120×100㎝の円形。
＜壁・底面＞壁は底面から緩やかに立ち上がる。深さは最深部で50㎝を測る。底面は概ね平坦である。
＜埋土＞上位の黒色土と下位の暗褐色土の２層からなる自然堆積と判断。Ⅱ層旧表土より古い。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞埋土の状況から縄文時代か。詳細は不明。

（杉沢）

ＳＫ05土坑（第８図、写真図版３）
＜位置・検出状況＞東側尾根部西側の高位部斜面に位置し、Ⅲ層面で検出。
＜平面形・規模＞開口部130×100㎝の楕円形。

＜壁・底面＞壁は直立し、深さは最深部で50cmを測る。底面は丸みを帯びる。
＜埋土＞上位の黒褐色土と下位の暗褐色土の２層に細分。下位の暗褐色土に地山ブロックを大量に含む。人為堆積と判断。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞不明。

（杉沢）

ＳＫ06土坑（第８図、写真図３版）
＜位置・検出状況＞東側尾根部東側の高位部平坦面に位置し、Ⅲ層面で検出。
＜平面形・規模＞開口部200×100cmの楕円形。
＜壁・底面＞壁はやや開いて立ち上がり、深さは最深部で40cmを測る。底面は丸みがある。
＜埋土＞３層に細分したが、黒褐色土を基調とする自然堆積と判断。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞不明。

（杉沢）

ＳＫ07土坑（第９図、写真図版４）
＜位置・検出状況＞西側尾根部中央、北東側の平坦部に位置し、検出面はⅢ層面である。
＜平面形・規模＞開口部211×95cmの楕円形を呈する。
＜埋土＞７層に細分したが、主体となるのは黒褐色土である。自然堆積と考えられる。
＜壁・底面＞壁は底面から緩やかに立ち上がり、深さは90cmを測る。底面は概ね平坦である。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞出土遺物がないため詳細は不明だが、形態から墓壙の可能性がある。

（鈴木・小林）

ＳＫ08土坑（第９図、写真図版４）
＜位置・検出状況＞西側尾根部中央、北東側の平坦部、ＳＫ07の西側に位置し、検出面はⅢ層面である。
＜平面形・規模＞開口部190×105cmの楕円形を呈する。
＜埋土＞４層に細分した。黒色土を主体とする。自然堆積と考えられる。
＜壁・底面＞壁は外傾して立ち上がり、深さは80cmである。底面には凹凸が認められる。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞詳細は不明である。

（鈴木）

ＳＫ10土坑（第９図、写真図版４）
＜位置・検出状況＞西側尾根部南東側に位置する。削平された部分の断面により認知した。検出面はⅢ層面である。
＜平面形・規模＞開口部径120cmの円形若しくは楕円形と推測される。
＜埋土＞表土を含め６層に細分した。
＜壁・底面＞残存部分の壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは125cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞詳細は不明である。

（鈴木）

ＳＫ11土坑（第９図、写真図版４）
＜位置・検出状況＞西側尾根部北西側の緩斜面に位置し、検出面はⅢ層である。
＜平面形・規模＞開口部225×145㎝の楕円形を呈する。
＜埋土＞黒褐色土主体の３層に分けられる。
＜壁・底面＞壁は緩やかに立ち上がり、深さは85㎝を測る。底面は木根による撹乱で凹凸が目立つ。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞詳細は不明である。

（鈴木）

ＳＫ12土坑（第10図、写真図版５）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の北西寄り、ＳＶ12の西側に位置し、検出面はⅢ層面である。
＜平面形・規模＞開口部230×110㎝の楕円形を呈する。
＜埋土＞８層に細分した。上位１層は黒色土で中位下位は褐色土との混合土である。
＜壁・底面＞壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは100㎝を測る。底面は概ね平坦である。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞詳細は不明である。

（鈴木）

ＳＫ13土坑（第10図、写真図版５）
＜位置・検出状況＞西側尾根部北西端の斜面部に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜平面形・規模＞開口部205×110㎝の不整形を呈する。
＜埋土＞４層に分層した。暗褐色土が主体で下位にマサ土の崩落土が見られる。
＜壁・底面＞壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは115㎝を測る。底面は概ね平坦である。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞詳細は不明である。

（鈴木）

ＳＫ19土坑（第10図、写真図版５）
＜位置・検出状況＞西側尾根部北西側の緩斜面部に位置し、検出面はⅢ層面である。
＜平面形・規模＞開口部185×117㎝の楕円形を呈する。
＜埋土＞上位の黒褐色土、下位の褐色土の２層に分けられる。
＜壁・底面＞壁および底面は、木根による撹乱で凹凸が目立つ。深さは60㎝を測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞詳細は不明である。

（鈴木）

ＳＫ22土坑（第10図、写真図版５）
＜位置・検出状況＞西側尾根部中央の緩斜面に位置し、検出面はⅢ層面である。
＜平面形・規模＞開口部95×80㎝の楕円形を呈する。
＜埋土＞４層に分層した。黄褐色土が主体で下位にマサが混入した漸移層が見られる。
＜壁・底面＞壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。深さは85㎝を測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞詳細は不明である。

（鈴木）

ＳＫ26土坑（第10図、写真図版６）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の南東寄り、調査区境に位置する。検出面はⅢ層面である。
＜平面形・規模＞全容は不明だが、開口部径150cm前後の円形～楕円形が推定される。
＜埋土＞４層に細分した。暗褐色土が主体の自然堆積と考えられる。
＜壁・底面＞壁はほぼ直立し、深さは最深部で70cmを測る。風化花崗岩が露出するためやや凹凸が認められる。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞不明である。

（小林）

（２）陥　し　穴

ＳＶ01陥し穴（第11図、写真図版６）
＜位置・検出状況＞東側尾根部の南西側高位部に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜平面形・規模＞開口部長さ300cm、幅60cmの溝状を呈する。長軸方向はおよそ北西－南東にある。
＜埋土＞４層に細分。にぶい黄褐色土や黄褐色土が主体の自然堆積と判断した。
＜壁・底面＞断面形はＹ字状を呈し、深さは最深部で80cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代。詳細は不明。

（杉沢）

ＳＶ02陥し穴（第11図、写真図版６）
＜位置・検出状況＞東側尾根部の南西側高位部に位置し、Ⅲ層面で検出した。前述のＳＶ01が隣接する。大半が調査区外へと延びるため、全容は不明。
＜平面形・規模＞確認できる部分では、開口部長さ210cm、幅110cmの溝状を呈する。長軸方向はおよそ北－南にある。
＜埋土＞上位の黒色土と下位の暗褐色土の２層に分層した。自然堆積と判断した。
＜壁・底面＞Ｕ字状を呈する。深さは最深部で110cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代。詳細は不明。

（杉沢）

ＳＶ03陥し穴（第11図、写真図版６）
＜位置・検出状況＞東側尾根部の南西側高位部の斜面に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜平面形・規模＞開口部長さ320cm、幅120cmの溝状を呈する。長軸方向はおよそ西－東にある。
＜埋土＞３層に細分。黒色土や黒褐色土が主体の自然堆積と判断した。
＜壁・底面＞断面形はＹ字状を呈し、深さは最深部で100cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代。詳細は不明。

（杉沢）

ＳＶ04陥し穴（第11図、写真図版７）
＜位置・検出状況＞東側尾根部の南西側高位部に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜平面形・規模＞開口部長さ220cm、幅60cmの溝状を呈する。長軸方向はおよそ北西－南東にある。

＜埋土＞３層に細分。黒色土や褐色土が主体の自然堆積と判断した。
＜壁・底面＞断面形はＹ字状を呈し、深さは最深部で90cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代。詳細は不明。

（杉沢）

ＳＶ05陥し穴（第11図、写真図版７）
＜位置・検出状況＞東側尾根部の南西側高位部の斜面に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜平面形・規模＞開口部長さ240cm、幅70cmの溝状を呈する。長軸方向はおよそ北西－南東にある。
＜埋土＞３層に細分。黒色土や黄褐色土が主体の自然堆積と判断した。
＜壁・底面＞断面形はＹ字状を呈し、深さは最深部で120cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代。詳細は不明。

（杉沢）

ＳＶ06陥し穴（第11図、写真図版７）
＜位置・検出状況＞東側尾根部の南西側高位部の斜面に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜平面形・規模＞開口部長さ210cm、幅70cmの溝状を呈する。長軸方向はおよそ北西－南東にある。
＜埋土＞４層に細分。黒色土や黒褐色土が主体の自然堆積と判断した。
＜壁・底面＞断面形はＹ字状を呈し、深さは最深部で90cmを測る。北西側の底面がオーバーハングする。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代。詳細は不明。

（杉沢）

ＳＶ07陥し穴（第12図、写真図版７）
＜位置・検出状況＞東側尾根部の南西側高位部の斜面に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜平面形・規模＞開口部長さ250cm、幅70cmの溝状を呈する。長軸方向はおよそ北西－南東にある。
＜埋土＞黒色土とにぶい黄褐色土の上下２層からなる自然堆積。
＜壁・底面＞断面形はＹ字状を呈し、深さは最深部で80cmを測る。底面は両端とも開口部より広がる。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代。詳細は不明。

（杉沢）

ＳＶ08陥し穴（第12図、写真図版８）
＜位置・検出状況＞東側尾根部の北西側高位部に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜重複遺構＞ＳＤ04・05に切られる。
＜平面形・規模＞開口部長さ220cm、幅50cmの溝状を呈する。長軸方向はおよそ西－東にある。
＜埋土＞３層に細分。暗褐色土や褐色土からなる自然堆積と判断した。
＜壁・底面＞断面形はＹ字状を呈し、深さは最深部で60cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代。詳細は不明。

（杉沢）

ＳＶ09陥し穴（第12図、写真図版８）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の東部、削平された断面により検出した。したがって、残存部分の精

査となった。検出面は表土下Ⅲ層面である。
＜平面形・規模＞残存平面形は溝状を呈し、開口部長さ210cm、幅45cmを測る。長軸方向はおよそ北－南にある。
＜埋土＞黒褐色土主体の単層である。自然堆積か。
＜壁・底面＞断面形はU字状を呈し、深さは最深部で80cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ10陥し穴（第12図、写真図版８）
＜位置・検出状況＞西側尾根部中央の削平断面により残存部分を検出した。検出面はⅢ層面である。
＜平面形・規模＞残存平面形は溝状を呈し、開口部長さ215cm、幅30cmを測る。長軸方向はおよそ西－東にある。
＜埋土＞５層に分層した。上位～中位は暗褐色土が主体であるが、下位はにぶい黄褐色土となる。自然堆積と考えられる。
＜壁・底面＞断面形はU字状を呈し、深さは100cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ11陥し穴（第12図、写真図版８）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の南東側に位置し、検出面はⅢ層面である。
＜平面形・規模＞平面形は溝状を呈し、開口部長さ330cm、幅32cmを測る。長軸方向はおよそ西－東にある。
＜埋土＞10層に分層した。上位に黒褐色土、中位に黄褐色土、最下層に暗褐色土が堆積している。自然堆積と考えられる。
＜壁・底面＞断面形はU字状を呈し、深さは最深部で105cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ12陥し穴（第12図、写真図版９）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の北西側の緩斜面に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜平面形・規模＞平面形は溝状を呈し、開口部長さ220cm、幅32～40cmを測る。長軸方向はおよそ北西－南東にある。
＜埋土＞４層に分層した。上位に黒褐色土、中位に黄褐色土、下位に暗褐色土が堆積している。自然堆積か。
＜壁・底面＞断面形は箱形を呈し、深さは最深部で90cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ13陥し穴（第13図、写真図版９）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の南東側緩斜面に位置し、Ⅲ層面で検出した。

＜平面形・規模＞平面形は円形を呈し、開口部径120×108cmを測る。
＜埋土＞4層に分層した。黒色土と褐色土が交互に堆積する。自然堆積と判断した。
＜壁・底面＞壁はほぼ垂直に立ち上がり、上部が外反してやや広くなる。深さは最深部で100cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞形態から縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ14陥し穴（第13図、写真図版９）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の北西寄りの緩斜面に位置し、検出面はⅢ層面である。
＜平面形・規模＞平面形は溝状を呈し、開口部長さ280cm、幅35cmを測る。長軸方向はおよそ西－東にある。
＜埋土＞6層に分層した。上位は主体となる黒褐色土に流入した地山混合土が混入し、中位は地山起源の黄褐色土、下位は暗褐色～黒色土が堆積する自然土層と判断される。
＜壁・底面＞断面形はU字状を呈し、深さは最深部で100cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ15陥し穴（第13図、写真図版９）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の北西寄りの緩斜面に位置し、検出面はⅢ層面である。
＜平面形・規模＞平面形は溝状を呈し、開口部長さ325cm、幅50cmを測る。長軸方向はおよそ北西－南東にある。
＜埋土＞7層に分層した。中位に黄褐色土が入り、最下位に黒褐色土が堆積している。
＜壁・底面＞断面形はY字状に近い形状を呈し、深さは最深部で80cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ16陥し穴（第13図、写真図版10）
＜位置・検出状況＞西側尾根部中央の南向き斜面に位置し、Ⅲ層面で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は溝状を呈し、開口部長さ271cm、幅約32cmを測る。長軸方向はおよそ北西－南東にある。
＜埋土＞4層に分層した。褐色土が主体である。
＜壁・底面＞断面形はU字状を呈し、深さは最深部で90cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ17陥し穴（第13図、写真図版10）
＜位置・検出状況＞西側尾根部中央の南向き斜面に位置し、Ⅲ層面で検出された。
＜平面形・規模＞平面形は溝状を呈し、開口部長さ234cm、幅55cmを測る。長軸方向はおよそ北西－南東にある。
＜埋土＞8層に分層した。上位は黒褐色土・暗褐色土・褐色土が混在する層、下位は暗褐色土主体である。

＜壁・底面＞断面形はＹ字状を呈し、深さは最深部で100cmを測る。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ19陥し穴（第14図、写真図版10）
＜位置・検出状況＞西側尾根部南東の南向き斜面に位置し、検出面はⅢ層面である。
＜平面形・規模＞平面形は溝状を呈し、開口部長さ278cm、幅27cmを測る。長軸方向はおよそ北西－南東にある。
＜埋土＞５層に分層した。上位は黒褐色土、下位は黄褐色土が主体。
＜壁・底面＞断面形は箱形を呈し、深さは35cmを測るが、上面が削平（近現代の畑作か）されていることから確認部分は浅い。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ21陥し穴（第14図、写真図版10）
＜位置・検出状況＞西側尾根部南東の南向き斜面に位置し、検出面はⅢ層面である。南東側は調査区外へ延びる。
＜平面形・規模＞平面形は溝状を呈し、確認部分で開口部長さ250cm、幅45～90cmを測る。長軸方向はおよそ南西－北東にある。
＜埋土＞９層に分層した。上位は黒色土、中～下位はにぶい黄褐色土系からなる。自然堆積か。
＜壁・底面＞断面形はＹ字状を呈し、深さは105cmを測る。底面には確認できる部分で逆茂木痕が３個確認された。径15cm前後、深さ40cm前後である。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ22陥し穴（第14図、写真図版11）
＜位置・検出状況＞西側尾根部北西側の西向きの斜面に位置し、Ⅲ層面で検出した。当初は土坑と考えたが、底面に逆茂木痕が検出されたことから陥し穴と判断した。
＜平面形・規模＞開口部185×105cmの楕円～長方形を呈する。長軸方向は北西－南東にある。
＜埋土＞３層に分層した。黒褐色土が主体で、一部木根撹乱による地山ブロックが混入する。
＜壁・底面＞壁はほぼ直立し、上部で外反する。深さは最深部で70cmを測る。底面には逆茂木痕がほぼ等間隔に４個確認された。径15～22cmの円形で、深さは47～72cmである。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木・小林）

ＳＶ23陥し穴（第14図、写真図版11）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の北西側の南向きの斜面に位置し、Ⅲ層面で検出した。当初は土坑と考えたが、底面に逆茂木痕が検出されたことから陥し穴と判断した。
＜平面形・規模＞開口部約180×118cmの楕円形を呈する。
＜埋土＞５層に分層した。黒褐色土が主体であるが、１層に黄褐色の細砂がモヤ状に混入している。

＜壁・底面＞断面形はU字状を呈し、深さは120cmを測る。底面には中央からと南東寄りに逆茂木痕が１個確認された。径20cmの円形で、深さは62cmである。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ24陥し穴（第15図、写真図版11）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の北西側西向き斜面に位置し、Ⅲ層面で検出した。当初は土坑と考えたが、底面に逆茂木痕が検出されたことから陥し穴と判断した。
＜平面形・規模＞開口部140×110cmの楕円形を呈する。
＜埋土＞３層に分層した。暗褐色土主体で下位層に褐色土が堆積している。
＜壁・底面＞壁は外傾しながら立ち上がり、深さは最深部で70cmを測る。底面中央に逆茂木痕が１個確認された。径20cmの円形、深さ90cmである。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ25陥し穴（第15図、写真図版11）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の北西側東向き斜面に位置し、検出面はⅢ層面である。当初は土坑と考えたが、底面に逆茂木痕が検出されたことから陥し穴と判断した。
＜平面形・規模＞開口部190×151cmの楕円形を呈する。
＜埋土＞３層に細分した。黒褐色土が主体で炭化物粒を含んでいる。
＜壁・底面＞壁はやや外傾して立ち上がる。深さは90cmである。底面に逆茂木痕を２個確認した。径15～25cmの円形、深さ50～75cmである。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ26陥し穴（第15図、写真図版12）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の北西側東向き斜面に位置し、検出面はⅢ層面である。当初は土坑と考え精査を開始したが、底面に逆茂木痕が検出されたことから陥し穴と判断した。
＜平面形・規模＞開口部164×110cmの楕円形を呈する。
＜埋土＞３層に分けられる。黒褐色土が主体である。
＜壁・底面＞壁は平坦な底面から外傾して立ち上がり、深さは90cmを測る。底面に中央に径23×15cm、深さ90cmの楕円形の逆茂木痕が確認された。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ27陥し穴（第15図、写真図版12）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の北西側東向き斜面に位置し、検出面はⅢ層面である。当初は土坑と考えたが、底面に逆茂木痕が検出されたことから陥し穴と判断した。
＜平面形・規模＞開口部127×88cmの長方形を呈する。
＜埋土＞暗褐色土主体の３層に分けられる。

＜壁・底面＞壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは25cmを測る。この周辺には林道が通ることから上面が削平されたため、深度がないものと考えられる。底面は平坦で、中央部に径25cm、深さ54cmの円形の逆茂木痕１個が確認された。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ28陥し穴（第15図、写真図版12）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の北西側東向き斜面に位置し、検出面はⅢ層面である。当初は土坑と考えたが、底面に逆茂木痕が検出されたことから陥し穴と判断した。
＜平面形・規模＞開口部約165×121cmの楕円形を呈する。
＜埋土＞３層に分層した。自然堆積と考えられる。
＜壁・底面＞壁は底面から直立し、上部で外反する。深さは最深部で100cmを測る。底面の中央からやや北寄りの位置で、径20cm、深さ80cmの円形の逆茂木痕が確認された。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ29陥し穴（第16図、写真図版12）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の南東側南向き斜面に位置し、検出面はⅢ層面である。当初は土坑と考えたが、底面で逆茂木痕を検出したことから陥し穴と判断した。
＜平面形・規模＞開口部156×99cmの楕円形を呈する。
＜埋土＞黒色土が大部分を占めるが、５層に細分した。
＜壁・底面＞断面形は台形状を呈し、深さは70cmを測る。底面は平坦で、中央部に径25cm、深さ50cmの逆茂木痕が１個確認された。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ30陥し穴（第16図、写真図版13）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の中央の南向き斜面に位置し、検出面はⅢ層面である。当初は土坑と考えたが、底面で逆茂木痕が検出されたことから陥し穴と判断した。
＜平面形・規模＞開口部160×143cmの楕円～長方形を呈する。
＜埋土＞５層に分層した。堆積土は上位から黒褐色土、褐色土、黄褐色土と続く。
＜壁・底面＞壁は底面から直立し、上半部でやや外傾する。深さは最深部で115cmを測る。底面は平坦で、やや北東寄り中央部に30×26cm、深さ54cmの楕円形の逆茂木痕が１個確認された。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ31陥し穴（第16図、写真図版13）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の北西側東向き斜面に位置し、検出面はⅢ層面である。当初は土坑と考えたが、底面で逆茂木痕が検出されたことから陥し穴と判断した。
＜平面形・規模＞開口部182×112cmの楕円形を呈する。

＜埋土＞６層に分層した。２層の黒褐色土が主体である。
＜壁・底面＞断面形は逆台形状を呈し、深さは最深部で90cmを測る。底面は平坦で、中心部で径25cm、深さ66cmの円形の逆茂木痕が１個確認された。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ32陥し穴（第16図、写真図版13）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の北西側西向きの斜面位置し、検出面はⅢ層面である。当初は土坑と考えたが、底面に逆茂木痕を検出したことから陥し穴と判断した。
＜平面形・規模＞開口部147×85cmの楕円形を呈する。
＜埋土＞埋土はにぶい黄褐色土が主体の６層に分層した。１層には炭化物が含まれる。
＜壁・底面＞壁はやや外傾して立ち上がり、中位に膨らみを持つ。深さは110cmを測る。底面はほぼ平坦で、中央から南東寄りの部分に逆茂木痕が１個確認された。径30cmの円形で、深さは55cmである。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ33陥し穴（第17図、写真図版13）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の中央、西向きの斜面に位置し、検出面はⅢ層面である。当初は土坑と考えたが、底面で逆茂木痕を検出したことから陥し穴と判断した。
＜平面形・規模＞開口部径120cmの円形を呈する。底面形は不整形である。
＜埋土＞３層に分層した。黒褐色土の１層には、炭化物の混入が確認された。
＜壁・底面＞壁はほぼ直立する。深さは85cmを測る。中央から西寄りに径25cm、深さ57cmの逆茂木痕が１個確認された。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ34陥し穴（第17図、写真図版14）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の中央の高位部に位置し、Ⅲ層面で検出した。当初は土坑と考えたが、底面で逆茂木痕を検出したことから陥し穴と判断した。
＜平面形・規模＞開口部径95cmの略円形を呈する。
＜埋土＞黒褐色土主体であるが、７層に細分される。自然堆積の様相を呈する。
＜壁・底面＞壁はほぼ直立し、深さは90cmを測る。底面は平坦で、中央に径20cm、深さ36cmの逆茂木痕が１個確認された。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

ＳＶ35陥し穴（第17図、写真図版14）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の中央の高位部に位置し、Ⅲ層面で検出した。当初は土坑と考えたが、底面で逆茂木痕を検出したことから陥し穴と判断した。
＜平面形・規模＞開口部径110～120cmの円形を呈する。

＜埋土＞６層に分層した。堆積の主体は黒褐色土であるが、２層は逆茂木が腐蝕した痕跡と推測される。
＜壁・底面＞壁はほぼ直立する。深さは最深部で95cmを測る。底面は平坦で、中央に径15×18cm、深さ約41cm、径約８cm、深さ20cmの円形の逆茂木痕２個が確認された。
＜遺物＞出土なし。
＜時期＞縄文時代の陥し穴と考えられるが、詳細は不明。

（鈴木）

（３）溝　　跡

ＳＤ01溝跡（第17図、写真図版14・15）
＜位置・検出状況＞東側尾根部の東端に位置し、表土直下のⅢ層面で検出した。
＜規模＞確認できる長さは６ｍ、幅1.6ｍ、深さ50cmである。およそ北－南に延びる。
＜埋土＞黒褐色土の単層。
＜遺物＞近代陶器が１点出土したが、掲載はしていない。
＜時期・機能＞近現代か。性格は不明。

（杉沢）

ＳＤ02溝跡（第17図、写真図版14・15）
＜位置・検出状況＞東側尾根部の南東側の高位部に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜規模＞確認できる長さ８ｍ、幅1.1ｍ、深さ10cmである。
＜埋土＞暗褐色土の単層。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞時期・性格は不明。

（杉沢）

ＳＤ03溝跡（第18図、写真図版15）
＜位置・検出状況＞東側尾根部の中央南側の高位部に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜規模＞確認できる長さ16ｍ、幅0.９ｍ、深さ20cmである。およそ南西－北東に延びる。
＜埋土＞褐色土の単層。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞時期・性格は不明。

（杉沢）

ＳＤ04溝跡（第18図、写真図版15）
＜位置・検出状況＞東側尾根部の中央北側の高位部に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜重複遺構＞ＳＶ08を切る。
＜規模＞確認できる長さ11ｍ、幅0.７ｍ、深さ10cmである。およそ北－南に延びる。
＜埋土＞暗褐色土の単層。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞時期・性格は不明だが、ＳＤ05と平行することから、両者には関連がある可能性が考えられる。

（杉沢）

ＳＤ05溝跡（第18図、写真図版15・16）
＜位置・検出状況＞東側尾根部の中央北側の高位部に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜重複遺構＞ＳＶ08を切る。
＜規模＞確認できる長さ12.5m、幅1.7m、深さ30cmである。およそ北－南に延びる。
＜埋土＞暗褐色土とにぶい黄褐色土の２層。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞時期・性格は不明だが、ＳＤ04と平行することから、両者には関連がある可能性が考えられる。

（杉沢）

ＳＤ06溝跡（第19図、写真図版16）
＜位置・検出状況＞東側尾根部の中央南側の高位部に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜規模＞確認できる長さ11m、幅0.5～1.2m、深さ20cmである。およそ北－南に延びる。
＜埋土＞暗褐色土の単層である。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞時期・性格は不明。

（杉沢）

ＳＤ08溝跡（第19図、写真図版16・17）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の西端の平坦面に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜重複遺構＞ＳＤ09と重複するが、合わせて同一遺構の可能性もある。
＜規模＞馬蹄形に延び、走向距離はおよそ20m超、幅は１m、深さ20～30cmである。
＜埋土＞暗褐色土の単層である。
＜遺物＞出土なし。
＜時期・機能＞時期・性格の詳細は不明であるが、周辺にトタン材といった廃材があることから、近現代の小屋があったと考えられ、これに伴う施設の可能性が高い。

（小林）

ＳＤ09溝跡（第19図、写真図版16・17）
＜位置・検出状況＞西側尾根部の西端の斜面に位置し、Ⅲ層面で検出した。
＜重複遺構＞上述したように、ＳＤ08と重複するが、合わせて同一遺構の可能性もある。
＜規模＞二つに分かれるが、総延長35m、幅は２～４m、深さは最深部で2.2mを測る。走向方向はおよそ北西－南東で、等高線に直行する。
＜埋土＞12層に細分したが、大半はマサ土の流入で、大きな花崗岩が混入する。自然堆積と判断した。
＜遺物＞埋土下位より肥前産の近世陶器(13)が出土している。
＜時期・機能＞上述したように、ＳＤ08と関連があれば近現代の可能性が高い。底面は雨列または水性作用による痕跡が見られるが、排水的な機能があったのであろうか。いずれにしても詳細は不明である。

（小林）

（4）堀　状　遺　構

1・2号堀状遺構（第7・20図、写真図版17・18）

＜位置・検出状況＞中央谷部の南側、東西両尾根の間に位置する。現況ではわずかな凹みが見られるが、ほぼ埋没し切っており、地山（Ⅲ層）を掘削している。

＜規模＞1号堀状遺構は、長さ約10m、幅約5m、表土からの深さは最深部で約3.5mを測る。東側尾根部の北西端の途中から掘削されている。幅・深さとも一定ではなく、東端はスロープ状に浅くなる。2号堀状遺構は、長さ約30m、幅約10m、表土からの深さは最深部で約4mを測る。西側・東側両尾根部の張り出しが接する地点から始まる。こちらも幅・深さとも一定ではなく、東端に向かって底面幅は狭く、深さは浅くなる。両遺構ともおよそ西－東方向へ延びる。

＜埋土＞1号堀状遺構は49層に細分した。東側尾根部の西端から流入したオリーブ褐色系のマサ土が縞状に堆積するが、北側は黄褐色土系のやや粘質のある土が多く堆積する。大半は流入したマサ土を主体とする自然堆積と考えられるが、8・16・37層といった黒ボク土が形成される部分や27・35層といったブロック土が顕著に混在する層も見受けられる。水成作用により底面近くの下位層は各々が縞状となる部分も見られる。2号堀状遺構は44層に細分した。1号同様に主体となるのは、オリーブ褐色をするマサ土である。西側尾根部や標高の高い北側から徐々に堆積した自然流入土と考えられる。1号との境にあたる南側は黄褐色土が同様に流入している。底面付近には巨大な風化花崗岩が点在するが、後述する4号堀状遺構も同様で、掘削時に出現したものをそのまま放置したものと考えられる。

＜遺物＞出土なし。

＜時期・機能＞調査区外の南西方向に延びるが、その先にあるため池（農業用か）で消失か。現況では窺い知れない。1号に関しては、埋土断面や底面の状況からは複数回の掘削が認められ、2～3時期に分かれる可能性があるが、大きな時期差はないものと思われる。両者とも、底面は南側に向かって低位となり、水成作用による凹凸が著しい。当初は規模や両尾根間に沿って存在することから、中世城館に関連する二重堀と考えたが、全体の調査を終えて、城館の縄張りとしてはあまり有効とは考え難い。類似する遺構として、鉱物資源を狙っての土採り溝等が考えられるが、詳細については時期も含めて不明である。

（小林）

3号堀状遺構（第21・22図、写真図版18・19）

＜位置・検出状況＞東側尾根部沿いの北側に位置する。地山面（Ⅲ層面）で検出したが、樹木痕が多く平面プランは分かりにくかった。小トレンチを設け、断面で各遺構との重複関係と遺構の深さを確認しつつ精査を行った。

＜規模＞長さは約29m、幅4.9m、検出面からの深さは最深部で2.1mを測る。北西から東側へと緩やかに曲がりながら延びる。両端はそのまま4号堀状遺構へと抜けている。

＜埋土＞20層に細分した。黒褐色土を主体に大小の礫を不規則に含んでおり、部分的に地山ブロックが混じるところもある。底面付近に砂質土が堆積している箇所もあるが、全体に見られるわけではなかった。自然堆積と思われる。

＜遺物＞出土なし。

＜時期・機能＞時期は不明。1・2号堀状遺構同様、当初は中世城館に関連する堀跡と考えたが、頂部に郭に相当する平坦部や施設が見られないことから、詳細は不明である。しかし、地質の面から趙哲済氏（当センターに（公財）大阪市博物館協会から出向）から、後述する4号堀状遺構が掘削されたこ

とにより、３号の位置する段丘の縁辺が弧状に崩落したことに起因する、いわゆるスベリ痕跡の可能性が高いとご教授いただいた。全体に埋土に黒ボク土が多い点などは、スベリ発生の際にそのまま上面から落ち込んだ表土と考えられる。

（杉沢・小林）

４号堀状遺構（第23・24図、写真図版19～21）

＜位置・検出状況＞東側尾根部裾沿いに位置する。地山面（Ⅲ層面）で検出した。現況でも凹みが認められる。

＜規模＞長さは約60m、幅５～12m、検出面からの深さは最深部で約10mを測る。やや蛇行するが、南東から北西方向にある。南東から北西に向かって低位となり、南東端は調査区外へ延び、北西端は２号堀跡とほぼ同じ場所で掘り込みが浅くなり消失する。

＜埋土＞３層に細分した。部分によってはもう少し層位が複雑化する部分もあるが、黒ボク土が大半を占める。底面には２号同様、巨大な花崗岩が数多く存在する。

＜遺物＞18世紀肥前産皿の陶器片が１点（６）出土した。

＜時期・機能＞当初は堀跡の可能性を考えたが、１・２号同様、防御施設としての有効性はあまり感じられない。なお、地権者から聞いた話では、調査区の北側には数十年前まで水田があったそうで、山から引水する際の水路として使用していたようである。近世から引き続き水路として使用していた可能性も考えられるが、詳細は不明である。

（小林）

第２表　遺構一覧表

遺 構 名	調査年度	掲載遺構図	備　　考
ＳＫ01	平成26年度	第8図(p28)	
ＳＫ02	平成26年度	第8図(p28)	
ＳＫ03 (3号土坑)	平成26年度	—	市道調査確認分、 『第647集 平成26年度概報』 にて報告済み。
ＳＫ04 (4号土坑)	平成26年度	—	市道調査確認分、 『第647集 平成26年度概報』 にて報告済み。
ＳＫ05	平成26年度	第８図(p28)	
ＳＫ06	平成26年度	第８図(p28)	
ＳＫ07	平成27年度	第９図(p29)	
ＳＫ08	平成27年度	第９図(p29)	
ＳＫ10	平成27年度	第９図(p29)	
ＳＫ11	平成27年度	第９図(p29)	
ＳＫ12	平成27年度	第10図(p30)	
ＳＫ13	平成27年度	第10図(p30)	
ＳＫ19	平成27年度	第10図(p30)	
ＳＫ22	平成27年度	第10図(p30)	
ＳＫ26	平成27年度	第10図(p30)	
ＳＶ01	平成26年度	第11図(p31)	
ＳＶ02	平成26年度	第11図(p31)	
ＳＶ03	平成26年度	第11図(p31)	
ＳＶ04	平成26年度	第11図(p31)	
ＳＶ05	平成26年度	第11図(p31)	
ＳＶ06	平成26年度	第11図(p31)	
ＳＶ07	平成26年度	第12図(p32)	
ＳＶ08	平成26年度	第12図(p32)	
ＳＶ09	平成27年度	第12図(p32)	
ＳＶ10	平成27年度	第12図(p32)	
ＳＶ11	平成27年度	第12図(p32)	
ＳＶ12	平成27年度	第12図(p32)	
ＳＶ13	平成27年度	第13図(p33)	
ＳＶ14	平成27年度	第13図(p33)	
ＳＶ15	平成27年度	第13図(p33)	
ＳＶ16	平成27年度	第13図(p33)	
ＳＶ17	平成27年度	第13図(p33)	
ＳＶ19	平成27年度	第14図(p34)	
ＳＶ21	平成27年度	第14図(p34)	
ＳＶ22	平成27年度	第14図(p34)	ＳＫ14を変更
ＳＶ23	平成27年度	第14図(p34)	ＳＫ15を変更
ＳＶ24	平成27年度	第15図(p35)	ＳＫ16を変更
ＳＶ25	平成27年度	第15図(p35)	ＳＫ17を変更
ＳＶ26	平成27年度	第15図(p35)	ＳＫ18を変更
ＳＶ27	平成27年度	第15図(p35)	ＳＫ20を変更
ＳＶ28	平成27年度	第15図(p35)	ＳＫ21を変更
ＳＶ29	平成27年度	第16図(p36)	ＳＫ23を変更
ＳＶ30	平成27年度	第16図(p36)	ＳＫ24を変更
ＳＶ31	平成27年度	第16図(p36)	ＳＫ25を変更
ＳＶ32	平成27年度	第16図(p36)	ＳＫ27を変更
ＳＶ33	平成27年度	第17図(p37)	ＳＫ29を変更
ＳＶ34	平成27年度	第17図(p37)	ＳＫ30を変更
ＳＶ35	平成27年度	第17図(p37)	ＳＫ31を変更
ＳＤ01	平成26年度	第17図(p37)	１号溝跡を変更
ＳＤ02	平成26年度	第17図(p37)	２号溝跡を変更
ＳＤ03	平成26年度	第18図(p38)	３号溝跡を変更
ＳＤ04	平成26年度	第18図(p38)	４号溝跡を変更
ＳＤ05	平成26年度	第18図(p38)	５号溝跡を変更
ＳＤ06	平成26年度	第19図(p39)	６号溝跡を変更
ＳＤ08	平成27年度	第19図(p39)	
ＳＤ09	平成27年度	第19図(p39)	
１号堀状遺構	平成27・28年度	第７図(p27)、 第20図(p40)	
２号堀状遺構	平成27・28年度	第７図(p27)、 第20図(p40)	
３号堀状遺構	平成26年度	第21～22図 (p41～42)	１号堀を変更
４号堀状遺構	平成26～28年度	第23～24図 (p43～44)	３号堀を変更

Y=52840
Y=52820
Y=52800
Y=52780
Y=52760
Y=52740
SD01
沢 跡
沢 跡
SK01
SD04
SD05
SV08
SK06
4号堀状遺構
SV07
SV06
SV05
SV04
3号堀状遺構
SD03
水 路
SD06
SK02
SV01
SK05
SV02
SV03
SD02
一関市道分調査区
1号堀状遺構
2号堀状遺構
0
1：800
20m
X=-118220
X=-118240
X=-118260
X=-118280
X=-118300
X=-118320

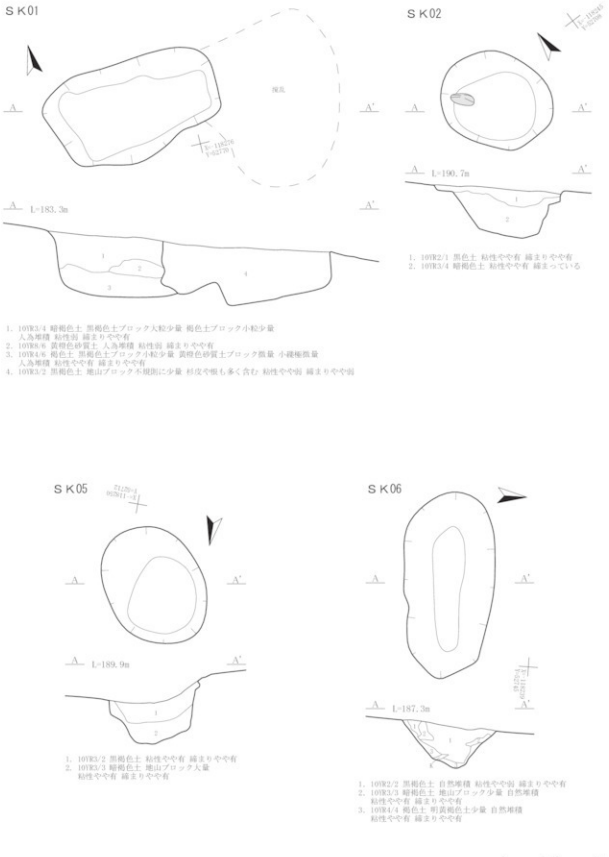
第５図　遺構配置図①

Y=52725
Y=52700
Y=52675
Y=52650
Y=52625
Y=52600
Y=52575
Y=52550
Y=52525
X=118075
X=118100
X=118125
X=118150
X=118175
X=118200
SV09
SV13
SK10
SV11
SV19
SV29
SK26
SV21
SV30
SV10
SV35
SV34
SK07
SK08
SV33
SK22
SV16
SV17
SV12
SK12
SV14
SV15
SV24
SV31
SV25
SV32
SK19
SK11
SV28
SV26
SV23
SV27
SD08
SK13
SV22
SD09
0
1:1000
25m

第６図　遺構配置図②

SD05
SV08
SD04
SK06
Y=52740
Y=52730
SV05
SV07
SV06
SV04
Y=52720
4号竪状遺構
3号竪状遺構
水路
SK05
SD06
Y=52710
SK02
SV03
SD02
SV09
SV13
1号竪状遺構
2号竪状遺構
SV19
SV29
SK26
0
1:400
10m
X=-118320
X=-118280
X=-118240
X=-118200

第７図　遺構配置図③



1. 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土ブロック大粒少量 褐色土ブロック小粒少量
　人為堆積 粘性弱 締まりやや有
2. 10YR6/6 黄橙色砂質土 人為堆積 粘性弱 締まりやや有
3. 10YR4/6 褐色土 黒褐色土ブロック1~2粒少量 黄橙色砂質土ブロック微量 小礫極微量
　人為堆積 粘性やや有 締まりやや有
4. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロック不規則に少量 径皮や堀も多く含む 粘性やや弱 締まりやや弱

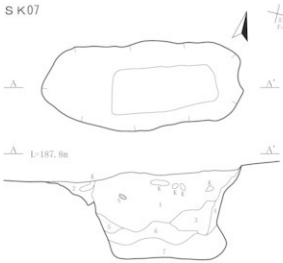
1. 10YR2/1 黒色土 粘性やや有 締まりやや有
2. 10YR3/4 暗褐色土 粘性やや有 締まっている

1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性やや有 締まりやや有
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック大量
　粘性やや有 締まりやや有

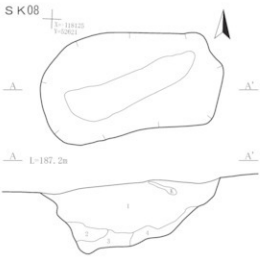
1. 10YR2/2 黒褐堆積 粘性やや弱 締まりやや有
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック少量 自然堆積
　粘性やや有 締まりやや有
3. 10YR4/4 褐色土 明黄褐色土少量 自然堆積
　粘性やや有 締まりやや有

0　1:40　1m

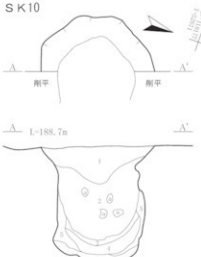
第８図 ＳＫ01・02・05・06土坑



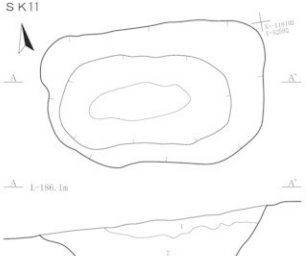
1. 10YR2/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや強
　北側に暗褐色土ヤヤ状に20%、下面に褐色シルトブロック(φ10cm以上)10%混入
2. 10YR3/2 黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや強　草の根3%混入
3. 10YR4/6 褐色砂　粘性なし　締まり強　掘り込み面の崩落土
4. 10YR3/2 黒褐色粘シルト　粘性やや弱　締まり中　礫(φ1～2mm)10%含む　草の根1%混入
5. 10YR3/4 暗褐色砂シルト　粘性弱　締まりやや強
　下面に1層土ブロック混入　上面に草の根1%混入
6. 砂シルト　粘性弱　締まりやや強　10YR4/4粘シルトと10YR3/4シルトの混合土
7. 10YR3/2 黒褐色粘シルト　粘性中　締まり中　黄褐色シルトが互状に堆積する



1. 10YR2/1黒色シルトと10YR3/3黒褐色シルトの混合土
　粘性中　締まりやや強 IV層土5%含む 木の根10%混入
2. 10YR3/3 暗褐色砂シルト　粘性やや弱　締まり中
　上面に1層土ヤヤ状に30%混入
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘シルト　粘性中　締まり強
　地山ブロック(φ5～10mm)15%混入
4. 砂　粘性やや弱　締まり強



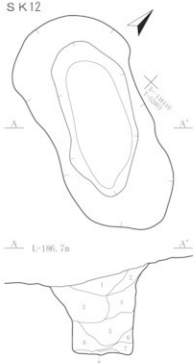
1. 10YR2/2 黒褐色
2. 10YR2/3 黒褐色
　aとした黄褐色ブロックが混入する
3. 10YR3/4 にぶい黄褐色
4. 10YR3/4 暗褐色
5. 10YR4/6 褐色
6. 10YR4/4 褐色



1. 10YR3/3 暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや弱
2. 10YR2/2 黒褐色粘シルト　粘性中　締まり中　地山ブロックの崩落土混入
3. 10YR4/6 褐色粘シルト　粘性弱　締まりやや強 2層土5%含む

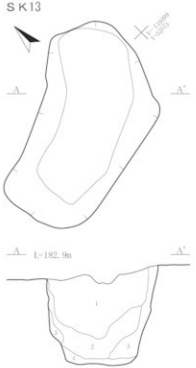
第9図 SK07・08・10・11土坑

SK12



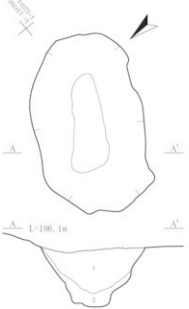
1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性強 締まり中
　マサ粒(φ1mm以下)5%含む 2層の漸移層
2. 10YR4/4 褐色シルト 粘性強 締まりやや強
　地山ブロックやや大に10%含む(漸移層)
3. 10YR2/2シルトと10YR4/4シルトの混合土
　粘性強 締まり中 マサ粒(φ1mm以下)10%含む
4. 10YR4/4 褐色砂シルト 粘性なし 締まりやや強
　層の中位にマサ土含む
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂シルト 粘性なし 締まり強
　4層との層理面に黒褐色土がモヤ状にくる
6. 掘り込み面地山崩落土
7. 10YR4/4 褐色砂シルト 粘性やや弱 締まりやや強
8. 10YR3/2 黒褐色砂シルト 粘性弱 締まり中 マサ粒5%含む

SK13



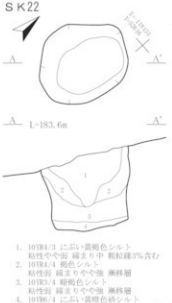
1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性弱 締まり中 マサ土10%含む
2. 10YR5/6 黄褐色砂シルト 粘性なし 締まりやや弱
　1層との層理面に10YR3/4シルト10%含む
3. マサ土 掘り込み面の地山崩落土
4. 10YR6/6 明黄褐色砂シルト 粘性なし 締まりやや弱

SK19



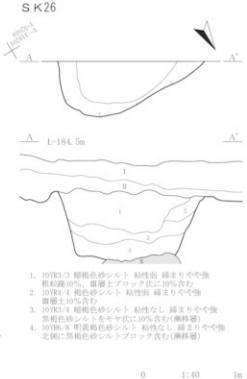
1. 10YR2/1 黒色粘シルト 粘性やや弱 締まりやや強
　粗粒砂2%、地山ブロック5%含む
2. 10YR4/4 褐色粘シルト 粘性やや弱 締まりやや強
　1層土ブロック状に5%含む(漸移層)

SK22



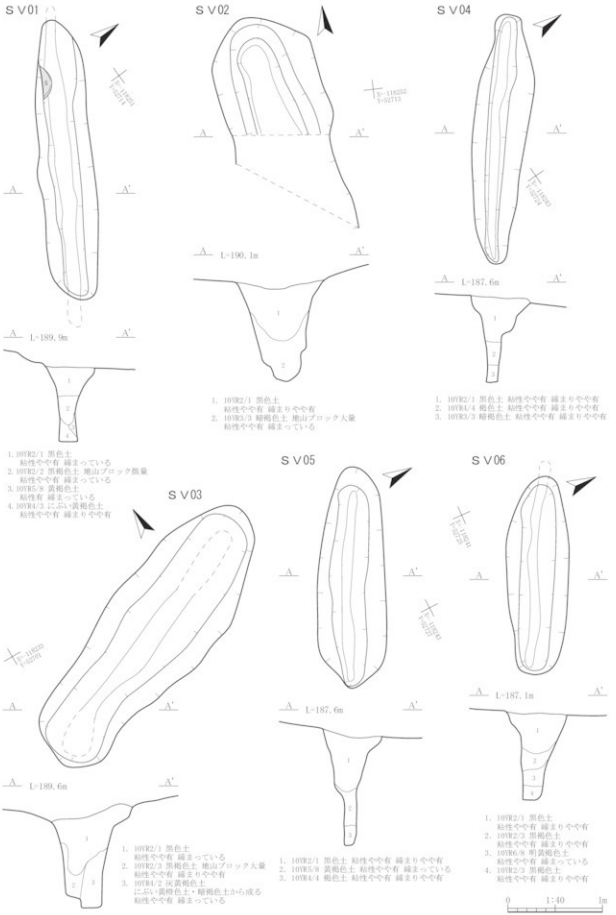
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
　粘性やや弱 締まり中 粗粒礫3%含む
2. 10YR4/4 褐色シルト
　粘性弱 締まりやや強 漸移層
3. 10YR3/4 暗褐色シルト
　粘性弱 締まりやや強 漸移層
4. 10YR6/4 にぶい黄色砂シルト
　粘性なし 締まりやや強 マサ粒10%含む

SK26

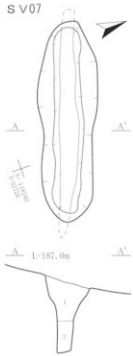


1. 10YR3/3 暗褐色砂シルト 粘性弱 締まりやや強
　粗粒礫10%、細層土ブロック状に10%含む
2. 10YR4/4 褐色砂シルト 粘性弱 締まりやや強
　細層土10%含む
3. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性なし 締まりやや強
　黒褐色砂シルトをモヤ状に10%含む(漸移層)
4. 10YR6/8 明黄褐色砂シルト 粘性なし 締まりやや強
　北側に黒褐色砂シルトブロック含む(漸移層)

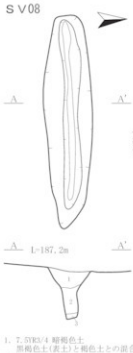
第10図　SK12・13・19・22・26土坑



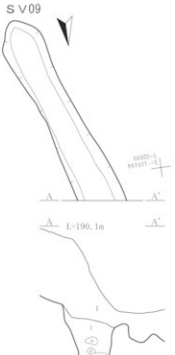
第11図　ＳＶ01～06陥し穴



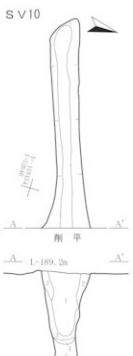
1. 10YR2/1 黒色土
粘性やや有 締まりやや有 地山ブロック微量
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
粘性やや有 締まりやや有



1. 7.5YR5/4 暗褐色土
黒褐色土(表土)と褐色土との混合土 若干の粘性有
2. 7.5YR4/6 褐色土
若干の黄褐色土(砂質土)が混入する 柔らかい 粘性有
3. 7.5YR4/6 褐色土
黒褐の黒褐色土が混じっている 2層より粘性が低い

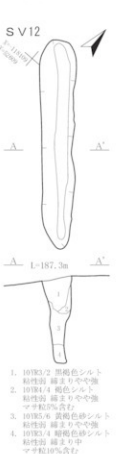


1. 10YR2/2 黒褐色
φとした暗褐色土ブロック混入



1. 10YR3/3 暗褐色粘シルト 粘性なし 締まりやや強
10YR3/3砂シルトと10YR4/4砂シルトの混合土
マサ粒10%含む
2. 10YR4/4 褐色粘シルト 粘性なし 締まりやや強
マサ粒5%含む(側移層)
3. 10YR5/6 黄褐色砂 粘性なし 締まり中
1層土モザ状に3%含む
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘シルト
粘性なし 締まりやや弱 マサ粒20%含む
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘シルト
粘性弱 締まり中 十面にマサ粒20%含む

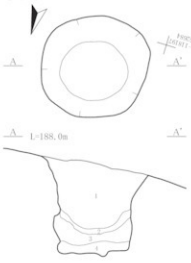
1. 10YR2/2 黒褐色シルト
粘性弱 締まりやや強
地山ブロック3%含む
2. 10YR3/2 黒褐色シルト
粘性やや強 締まり中
地山土10%含む
3. 10YR3/2シルトと10YR5/6シルトの混合土
粘性やや強 締まりやや強
4. 10YR3/3 暗褐色シルト
粘性やや強 締まり中
地山ブロック(φ2～5mm)5%含む
5. 10YR5/6 黄褐色シルト
粘性弱 締まりやや強
掘り込み面の崩落土
6. 10YR2/2 黒褐色シルト
粘性弱 締まり中
地山ブロック10%含む マサ粒1%含む
7. 3層に似る
こちらの方が黄褐色シルトの割合が高い
8. 10YR5/6 黄褐色シルト
粘性弱 締まりやや強
掘り込み面の崩落土
9. 10YR5/8 黄褐色砂シルト
粘性なし 締まりやや強
10. 10YR3/3 暗褐色砂シルト
粘性なし 締まり中
マサ粒3%含む



1. 10YR3/2 黒褐色シルト
粘性弱 締まりやや強
2. 10YR4/4 褐色シルト
粘性弱 締まりやや強
マサ粒5%含む
3. 10YR5/6 黄褐色砂シルト
粘性弱 締まりやや強
4. 10YR3/4 暗褐色砂シルト
粘性弱 締まり中
マサ粒10%含む

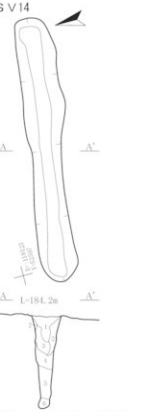
第12図　ＳＶ07～12陥し穴

ＳＶ13



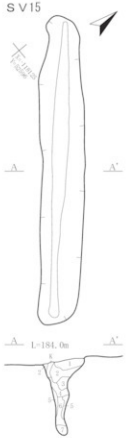
1. 10YR2/1 黒色 粘性弱 締まり強
下部に地山ブロック5%含む
2. 10YR4/4 褐色 粘性やや弱 締まり中
地山ブロック20%含む
3. 10YR2/1 黒色 粘性やや弱 締まりやや強
1層に混るが地山ブロック層全体にまばらに含む
4. 10YR4/4 褐色 粘性やや弱 締まり中
マサ粒10%含む

ＳＶ14



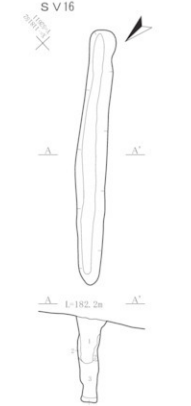
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや弱
地山ブロック（φ5～10mm）5%含む
2. 10YR6/6 明黄褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
10YR2/2シルト10%含む
3. 10YR3/2シルトと10YR6/6シルトの混合土
粘性やや弱 締まりやや強 粗粒砂5%含む
4. 10YR5/6 黄褐色シルト質粘土
粘性中 締まりやや強 粗粒砂5%含む
5. 10YR3/4 暗褐色砂シルト
粘性弱 締まりやや強 粗粒砂10%含む
6. 10YR2/1 黒色シルト
粘性やや弱 締まり中 マサ粒1%含む

ＳＶ15



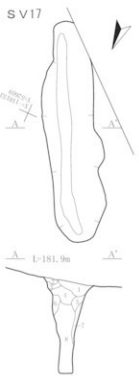
1. 10YR2/2 黒褐色シルト
粘性やや弱 締まり中 地山ブロック10%含む
2. 10YR3/3 暗褐色シルト
粘性弱 締まり中 粗粒砂3%含む
3. 10YR6/6 明黄褐色シルト
粘性やや弱 締まり中 10YR2/2シルト10%含む
4. 10YR3/3 暗褐色シルト
粘性弱 締まりやや強 粗粒砂1%含む
5. 10YR5/6 黄褐色シルト質粘土
粘性中 締まりやや強 粗粒砂5%含む
6. 10YR5/6 黄褐色シルト
粘性弱 締まりやや強 粗粒砂5%含む
7. 10YR2/2 黒褐色シルト
粘性弱 締まり中

ＳＶ16



1. 10YR3/4砂シルトと10YR4/6砂シルトの混合砂シルト
粘性弱 締まりやや強 粗粒砂10%含む
2. 10YR4/6 褐色砂シルト 粘性弱 締まり中
掘り込み面の崩落土
3. 10YR4/4 褐色砂 粘性なし 締まり中
黒色シルトブロック（φ5～10mm）1%含む
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂 粘性なし 締まり中

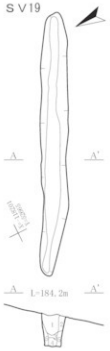
ＳＶ17

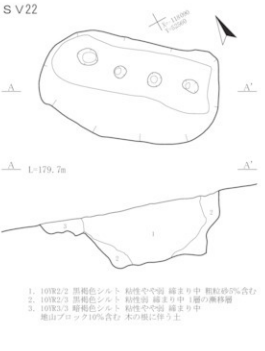


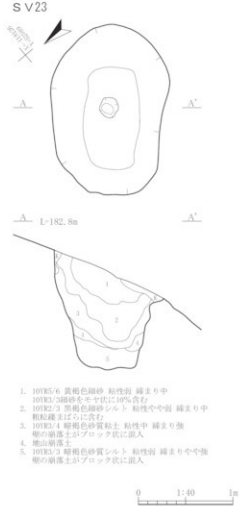
1. 10YR3/2 黒褐色砂シルト
粘性弱 締まりやや強 地山ブロック3%含む
2. 10YR3/3 暗褐色砂シルト
粘性なし 締まりやや強 1層の漸移層
3. 10YR4/4 褐色砂シルト
粘性なし 締まりやや弱 フカフカしている
4. 10YR3/3シルトと10YR2/3シルトの混合土
粘性やや弱 締まりやや強 1層土やや粒に混じる
5. 10YR4/4 褐色砂 粘性なし 締まり中
1層土やや広く1%含む
6. 10YR4/6 褐色砂シルト
粘性弱 締まり中 掘り込み面の崩落土
7. 10YR4/6 褐色砂シルト
粘性弱 締まり中 掘り込み面の崩落土
8. 10YR4/4 褐色砂シルト
粘性なし 締まり中 地山土まばらに20%含む

0　1:40　1m

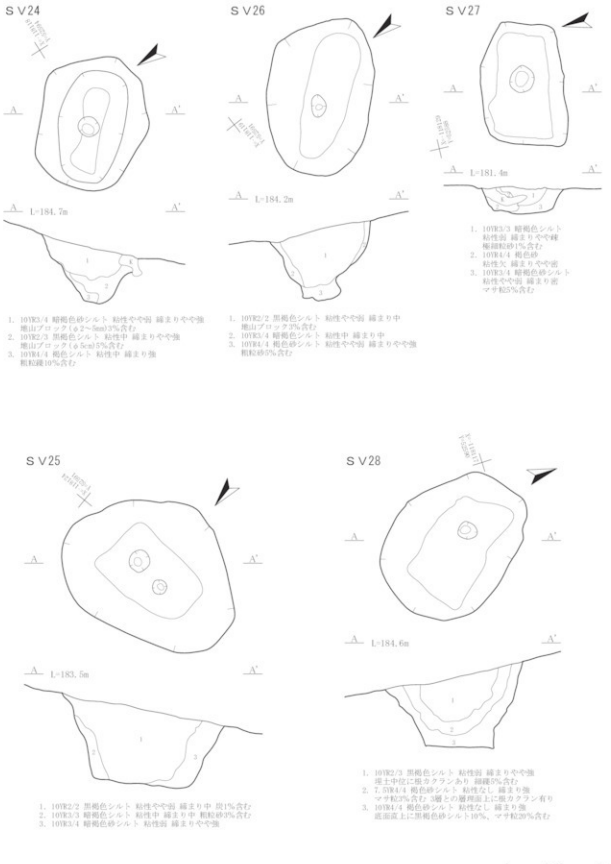
第13図　ＳＶ13～17陥し穴







第14図　ＳＶ19・21～23陥し穴



1. 10YR3/4 暗褐色砂シルト 粘性やや弱 締まりやや強
   地山ブロック(φ2～5mm)3%含む
2. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締まりやや強
   地山ブロック(φ5cm)5%含む
3. 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 締まり強
   粗粒礫10%含む

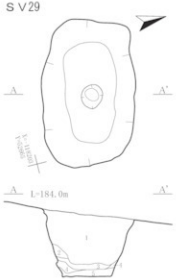
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
   地山ブロック3%含む
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 締まり中
3. 10YR4/4 褐色砂シルト 粘性やや弱 締まりやや強
   粗粒砂5%含む

1. 10YR3/3 暗褐色シルト
   粘性弱 締まりやや疎
   極細粒砂1%含む
2. 10YR4/4 褐色砂
   粘性欠 締まりやや密
3. 10YR3/4 暗褐色砂シルト
   粘性やや弱 締まり密
   マサ粒5%含む

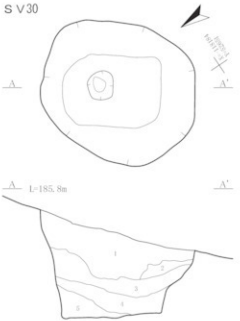
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 締まり中 炭1%含む
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 締まり中 粗粒砂3%含む
3. 10YR3/4 暗褐色砂シルト 粘性弱 締まりやや強

1. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性弱 締まりやや強
   焼土中位に焼ガラランあり 細礫5%含む
2. 7.5YR4/4 褐色砂シルト 粘性なし 締まり強
   マサ粒2%含む 3層との層界面上に焼ガララン有り
3. 10YR4/4 褐色砂シルト 粘性なし 締まり強
   底面直上に黒褐色砂シルト10%、マサ粒20%含む

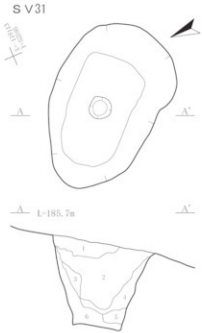
第15図　S V24～28陥し穴



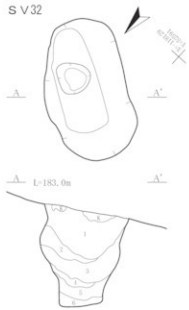
1. 10YR2/1 黒色粘シルト 粘性やや強 締まりやや疎
   粗粒砂全体にまばらに含む
2. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性弱 締まり密
   地山掘り込み面の崩落土
3. 10YR3/2 黒褐色粘シルト 粘性中 締まりやや密
   地山土20%含む
4. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性弱 締まり密
   地山掘り込み面の崩落土
5. 10YR2/2 黒褐色粘シルト 粘性やや強 締まりやや密
   粗粒砂10%含む



1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性弱 締まりやや弱 細砂10%含む
2. 10YR4/6 褐色シルト 粘性弱 締まり中 細砂20%含む
3. 10YR3/3 暗褐色砂シルト 粘性なし 締まりやや強 細礫10%含む
4. 10YR5/6 黄褐色砂シルト 粘性なし 締まり強 細砂10%含む
5. 10YR4/6 褐色砂シルト 粘性なし 締まり強 細砂30%含む



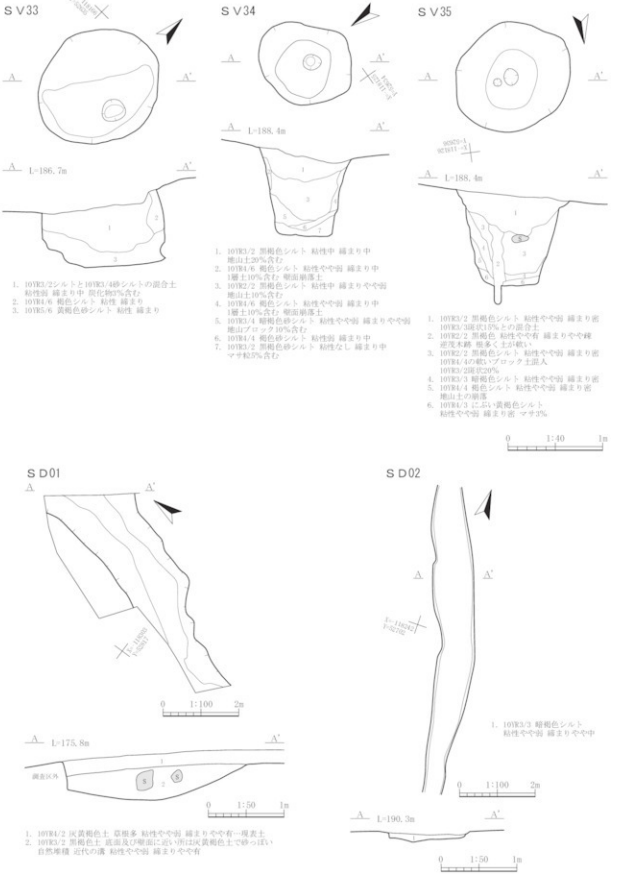
1. 10YR4/4 褐色シルト 粘性弱 締まり強
2. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性弱 締まり強 マサ粘5%含む
3. 10YR4/4 褐色シルト 粘性弱 締まりやや強 廃移層の土・細礫1%含む
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱 締まりやや強 廃移層の土・細礫1%含む
5. 10YR3/4 暗褐色砂シルト 粘性なし 締まりやや強 細礫10%含む
6. 10YR4/6 褐色砂シルト 粘性なし 締まりやや強 細礫3%含む



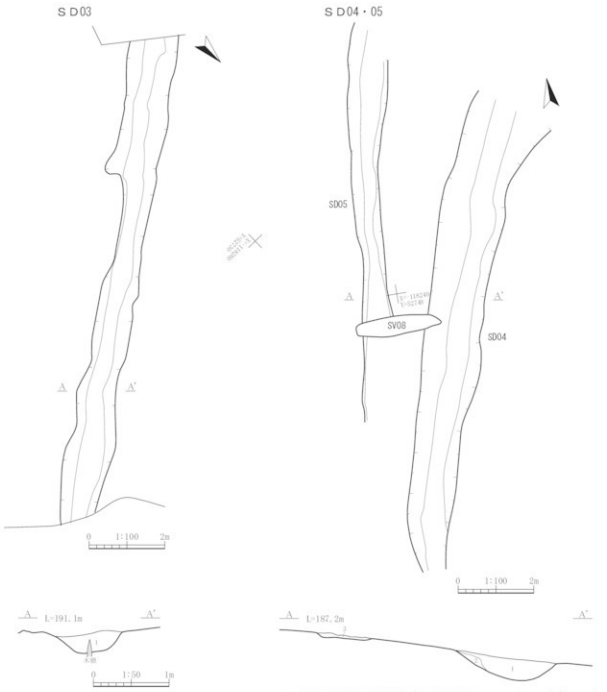
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱 締まり密
   炭化物1%斑状に混入、マサ2%斑状に混入
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱 締まり密 マサ2%斑状に混入
3. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや弱 締まり密
   10YR5/6 30%斑状に混入、マサ2%斑状に混入
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密
   10YR3/2 10cmブロック混入、マサ2%斑状に混入
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 粘性弱 締まり密
   4層よりやや明るい土色、マサ2%斑状に混入
6. 10YR6/6 明黄褐色シルト 粘性やや弱 締まり密 マサ5%斑状に混入

0　1:40　1m

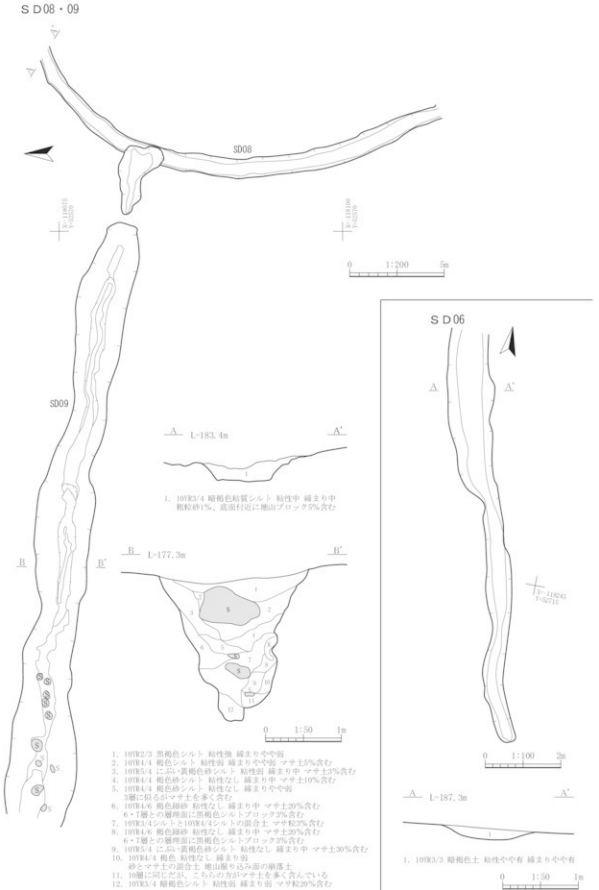
第16図　SV29～32陥し穴



第17図　ＳＶ33～35陥し穴、ＳＤ01・02溝跡

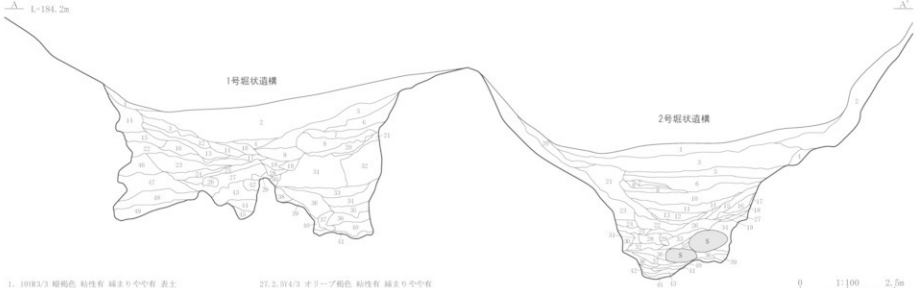


第18図　ＳＤ03～05溝跡



第19図　ＳＤ06・08・09溝跡

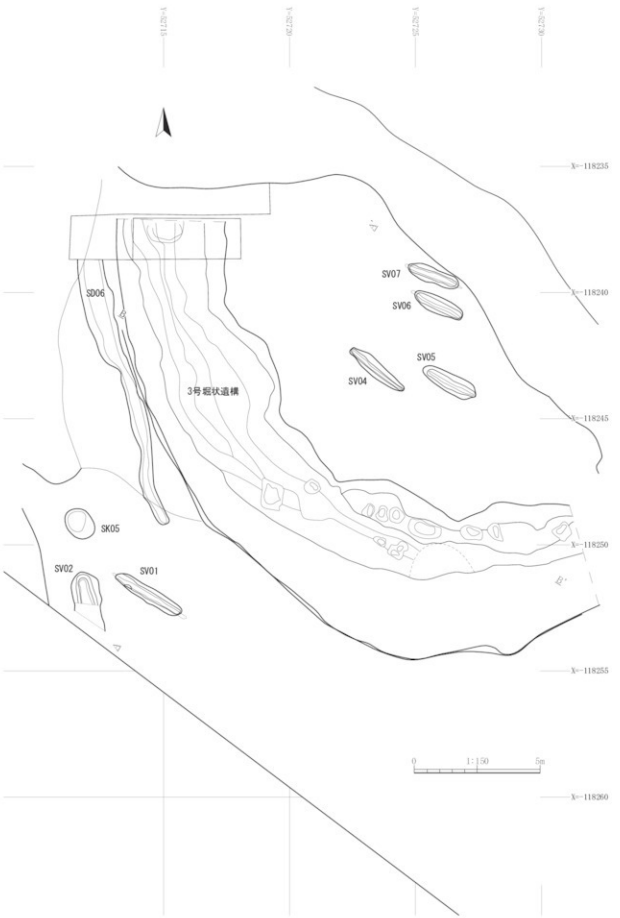
1・2号堀状遺構　　※対応平面図は第７図を参照



1. 10YR3/3 暗褐色 粘性有 締まりやや有 表土
2. 10YR3/4 暗褐色 粘性有 締まりやや有 表土
3. 10YR2/3 黒褐色 粘性有 締まりやや有 黄褐色土を多く混入
4. 2.5Y3/2 暗灰黄色 粘性やや有 締まりやや有
5. 2.5Y6/4 にぶい黄色 粘性有 締まりやや有
6. 2.5Y6/4 にぶい黄色 粘性有 締まりやや有 下位に黒褐色土含む
7. 10YR4/4 褐色 粘性有 締まりやや有 縞状に堆積
8. 10YR2/2 黒褐色 粘性有 締まりやや有 縞状に堆積
9. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘性やや有 締まり有 縞状に堆積
10. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
縞状に黄褐色土を含む
11. 2.5Y5/3 黄褐色 粘性やや有 締まりやや有
12. 10YR3/3 暗褐色 粘性有 締まりやや有
13. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
一部オリーブ色マサ土含む
14. 10YR3/4 暗褐色 粘性有 締まりやや有
15. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
16. 10YR2/3 黒褐色 粘性有 締まりやや有
17. 2.5Y3/1 黒褐色 粘性有 締まりやや有
一部オリーブ色マサ土含む
18. 2.5Y3/2 黒褐色 粘性有 締まりやや有
一部オリーブ色マサ土含む
19. 2.5Y5/4 黄褐色 粘性やや有 締まり有 暗褐色土含む
20. 2.5Y6/4 にぶい黄色 粘性やや有 締まり有
21. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘性やや有 締まり有
22. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
23. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘性有 締まり欠
24. 2.5Y4/6 オリーブ褐色 粘性有 締まりやや有 黄褐色マサ土含む
25. 2.5Y5/6 黄褐色 粘性やや有 締まりやや有
26. 2.5Y6/6 明黄褐色 粘性有 締まり有 ブロック土
27. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘性有 締まりやや有
暗褐色土・黄褐色土ブロック混入
28. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘性有 締まりやや有
暗褐色土・黄褐色土ブロック混入
29. 2.5Y5/3 黄褐色 粘性欠 締まり有
30. 2.5Y5/4 黄褐色 粘性欠 締まり有
31. 2.5Y6/4 にぶい黄色 粘性やや有 締まり有
32. 2.5Y6/3 にぶい黄色 粘性やや有 締まり有
33. 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘性欠 締まりやや有
34. 2.5Y6/4 にぶい黄色 粘性やや有 締まり有
35. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
黄褐色土ブロックやや多く含む
36. 2.5Y5/6 黄褐色 粘性やや有 締まりやや有
37. 10YR3/3 暗褐色 粘性有 締まりやや有
38. 10YR3/4 暗褐色 粘性有 締まりや 黄白色土ブロック含む
39. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
40. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
41. 2.5Y3/2 黒褐色 粘性やや有 締まり欠
黄褐色土ブロック多く含む
42. 2.5Y5/4 黄褐色 粘性やや有 締まり有
オリーブ褐色マサ土含む
43. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘性欠 締まりやや有
44. 10YR3/4 暗褐色 粘性有 締まり欠
45. 2.5Y5/4 黄褐色 粘性欠 締まり欠
46. 2.5Y5/4 黄褐色 粘性欠 締まりやや有
47. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘性欠 締まりやや有
48. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘性欠 締まりやや有
一部黒色土ブロック含む
49. 2.5Y3/2 黒褐色 粘性やや有 締まり欠

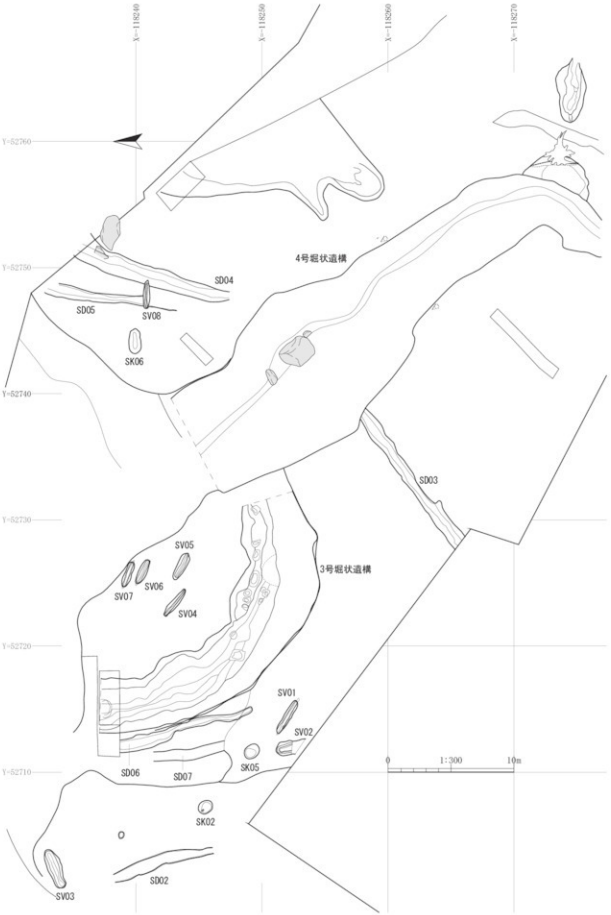
1. 10YR3/3 暗褐色 粘性有 締まりやや有 表土
2. 10YR3/4 暗褐色 粘性やや有 締まりやや有
黄灰色土混入
3. 2.5Y5/4 黄褐色 粘性やや有 締まりやや有
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘性やや有 締まりやや有
5. 2.5Y5/3 黄褐色 粘性欠 締まりやや有
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘性やや有 締まりやや有
灰白色土一部混入
7. 2.5Y4/6 オリーブ褐色 粘性欠 締まりやや有
8. 2.5Y5/4 黄褐色 粘性やや有 締まりやや有
黒褐色土混入
9. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
10. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
11. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
12. 2.5Y7/4 浅黄色 粘性欠 締まりやや有
13. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
14. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
15. 2.5Y5/4 黄褐色 粘性欠 締まりやや有
オリーブ褐色土を少量含む
16. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
17. 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘性欠 締まり欠
18. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘性欠 締まりやや有
19. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
20. 10YR4/6 褐色 粘性やや有 締まりやや有
21. 2.5Y6/6 明黄褐色 粘性やや有 締まり有
22. 2.5Y6/4 にぶい黄色 粘性やや有 締まりやや有
23. 2.5Y5/3 黄褐色 粘性やや有 締まりやや有
24. 2.5Y6/3 にぶい黄色 粘性やや有 締まりやや有
25. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘性やや有 締まりやや有
26. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
27. 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘性欠 締まりやや有
28. 10YR3/3 暗褐色 粘性有 締まり有
一部オリーブ褐色土含む
29. 10YR3/4 暗褐色 粘性有 締まり有
30. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘性やや有 締まりやや有
31. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
32. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘性やや有 締まりやや有
暗褐色土含む
33. 2.5Y3/2 黒褐色 粘性やや有 締まりやや有
34. 2.5Y5/4 黄褐色 粘性欠 締まりやや有
35. 10YR3/3 暗褐色 粘性有 締まりやや有
36. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘性有 締まりやや有
37. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘性有 締まりやや有
38. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
39. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘性欠 締まりやや有
40. 2.5Y4/6 オリーブ褐色 粘性欠 締まり欠
41. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
42. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
43. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘性やや有 締まりやや有
44. 2.5Y4/6 オリーブ褐色 粘性欠 締まりやや有

第20図　１・２号堀状遺構

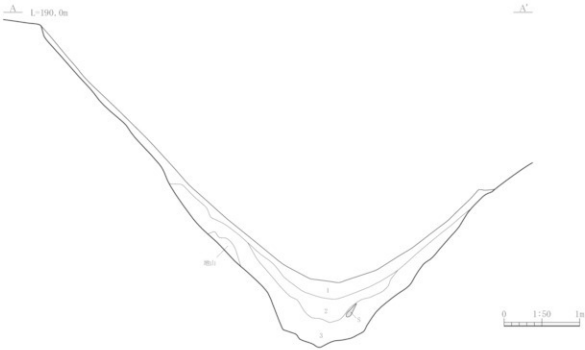


第21図　3号堀状遺構（1）

第22図　3号堀状遺構（2）



第23図　4号堀状遺構（1）



1. 10YR3/3 暗褐色土 草木根多 粘性弱 締まり弱一差土
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性やや有 締まりやや有
3. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロック少量 褐灰色砂を部分的に含む 粘性やや有 締まりやや有

第24図　4号堀状遺構（2）

Ⅴ 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物の総量は25点のみである。内訳としては、陶磁器が17点、古銭が１点、土器が３点、石器類が４点である。全点を掲載したが、縄文土器・石器類については写真のみの掲載とした。

多くを占めるのは陶磁器類で、大部分が近世に含まれる。４のみ古く、中世にまで遡る可能性がある。産地は肥前産がほとんどだが、瀬戸美濃・大堀相馬産のものも少数だが含まれる。遺構外からの出土が多く、遺構時期を特定できるような資料は少ない。他に近世の資料としては、寛永通寶が１点出土している。

縄文時代の遺物として、縄文土器・石器類が僅かであるが出土している。土器はいずれも摩滅が著しく、19のみ地文が確認できるが、判然としない。石器類は多種認められるが、いずれも遺構外からの出土である。22は黒曜石の剥片である。23は横型石匙であるが、約半分が欠損している。24は石核か。25は砥石と考えられ、４面ともに擦痕が認められ、表面は滑らかである。

第３表　遺物観察表

No.	出土地点・層位	種別	特徴・概要
1	東側尾根部 東側	陶器	皿 肥前 18C?
2	東側尾根部 東側	磁器	碗?鉢? 肥前 17C～18C
3	東側尾根部 東側	陶器	皿（小） 肥前 18C後
4	東側尾根部 東側	陶器	向付（織部） 瀬戸美濃 16C末～17C初頃
5	東側尾根部 東側	陶器	皿（中） 肥前 18C後
6	４号堀状遺構	陶器	皿 肥前 18C
7	東側尾根部 表採	陶器	皿 肥前 18C
8	東側尾根部 東側斜面 検出面	磁器	折縁皿 白磁?古瀬戸? 18C
9	西側尾根部 表採	陶器	皿 肥前(2期) 17C
10	西側尾根部 南側斜面	陶器	皿 肥前 18C
11	西側尾根部 表採	陶器	皿 肥前 18C後
12	SD09 埋土下位	陶器	碗？ 肥前 18C
13	西側尾根部 表採	陶器	碗 肥前 18C～19C
14	東側尾根部 表採	陶器	皿 肥前 18C後
15	東側尾根部 表採	陶器	皿（小） 肥前？ 19C
16	西側尾根部 表採	陶器	碗 大堀相馬 19C
17	西側尾根部 東側斜面 Ⅰ～Ⅱ層	陶器	壜（小） 東北在地？ 19C
18	西側尾根部 東側 検出面	古銭	寛永通寶 背面無文
19	東側尾根部 南側高位部	縄文土器	LR縦？
20	東側尾根部 中央 Ⅰ層	縄文土器	摩滅著しく不明
21	東側尾根部 南側高位部	縄文土器	摩滅著しく不明
22	西側尾根部 北東側斜面 Ⅰ～Ⅱ層	石器	剥片 黒曜石／産地不明
23	東側尾根部 Ⅰ層	石器	石匙 頁岩／古生代北上山地産
24	東側尾根部 南側高位部	石器	石核？
25	東側尾根部 Ⅰ層	石器	砥石 四面に擦痕あり

VI 総　　括

今回の調査は、室根バイパス整備事業に伴い、14,873㎡を対象として３箇年にわたり行った緊急発掘調査である。調査の結果、検出された遺構は土坑13基、陥し穴33基、溝跡８条、堀状遺構４条である。出土遺物は、陶磁器17点、古銭１点、縄文土器３点、石器類４点である。遺構の形態や出土遺物から、時代としては大きく分けて、縄文時代と中～近世に分かれる。ここでは総括として、最も多く確認された縄文時代の陥し穴についてと、この周辺の中～近世の歴史背景を踏まえ本遺跡の全体像についての考察を行いたい。

1　陥し穴について

今回の調査では33基が確認された。検出地点は、８基が東側尾根部に、25基が西側尾根部にと西側尾根部の方が多いが、調査範囲が西側尾根部は頂部から斜面とほぼ尾根全体が対象であるのに対し、東側尾根部は斜面の一部であるためと考えられ、分布は周辺にも及ぶものと推察される。平面形状から、大きく分けて①楕円形～溝状を呈するもの、②楕円形～長方形を呈するもの、③円形を呈するものに分別される。

①には、ＳＶ01～12・14～17・19の18基が含まれる。全長はＳＶ11の340㎝が最長で、ＳＶ07が220㎝と最小値を示すが、概ね２～３m内のものが多い。幅は開口部が崩落により広がるものがあったりと各々異なるが、底部幅で見ると、10～20㎝と狭いものが多い。断面形状は開口部幅が広いものについては漏斗状やＹ字状となるが、それ以外の大半はＵ字状となるものが多い。深さは１m前後を測るものが多いが、ＳＶ08・19など50㎝に満たないものもある。おそらく、現代まで畑地であったため、部分的に削平されたことに起因するのであろう。底面に逆茂木痕が確認されたものはＳＶ21のみであった。長軸方向は、およそ東－西方向にあるものがほとんどだが、これは等高線に平行して作られているためと判断できる。これから外れ、等高線と直行するのはＳＶ21のみである。分布としては、東側尾根部では平坦部にあるＳＶ04～07にはまとまりが認められる。西側尾根部では、全体的には散在している印象だが、尾根頂部にあるＳＶ09～11はほぼ等間隔に位置することから規則性が窺える（ＳＶ12も含まれるか）。また、斜面部のＳＶ14・15、ＳＶ16・17のように２つが並列しており、セットで配置された可能性が考えられる。

②には、ＳＶ22～32の11基が該当する。平面形状から更に細分は可能だが、ここでは一括する。開口部は崩落によるためか不整形なものも多いが、底部形を見るとＳＶ22・23・25・27・28・30・31は隅丸長方形、ＳＶ24・26・29・32はやや歪な楕円形を呈する。底部の規模は概ね110×60～70㎝前後のものが多い。深さは80㎝前後と110㎝前後を測るものに大別できる。底面には逆茂木痕が確認できるが、中央部に１個付設されたものが最も多い（ＳＶ23・24・26～32）。ＳＶ25は中央に２個、ＳＶ22は等間隔に４個確認できる。分布状況としては、ＳＶ29を除いて、西側尾根部北西側の南側斜面に集中して立地しており、各陥し穴の長軸方向は溝状と同様におよそ東－西にあり、等高線に平行する。

③には、ＳＶ13・33・34・35の４基が該当する。規模はＳＶ34のみやや小さく、開口部径90㎝ほどだが、その他は径120㎝を測る。底部径はＳＶ33のみ歪な形状をするが、その他は径約60㎝の円形を呈する。深さはＳＶ33のみ浅く約60㎝程度だが、その他は90～100㎝を測る。底面にはＳＶ13を除いて逆茂木痕が確認できる。ＳＶ35は埋土断面から逆茂木が残存した状態で埋没したものと判断される。分布に

ついては顕著な傾向は見られないが、ＳＶ34・35はセット関係か。

全体を通してだが、分布状況が偏って密集しているのが看取できる。東側尾根部のＳＶ04～07周辺、西側尾根部のＳＶ14・15・23～28周辺が顕著である。また、全部で33基が確認されたが、これらが重複することが一切ないことから、①～③と平面形状から分類したが、すべて同時期に計画的に配置された可能性も考えられる。遺物の出土が皆無なため、その詳細な時期については特定できないが、縄文時代の一時期にこの地域を狩猟場としていたのは明らかであり、この周辺近くに集落が存在する可能性が窺える。

2　中～近世について

八幡沖遺跡は、当事業に伴い事前に行われた県教育委員会の試掘調査により、平成25年度に新規発見・登録された遺跡である。その際に確認された本報告の堀状遺構を中世城館の堀跡の可能性があるとしている。調査過程においても、尾根裾に沿ってあることや規模の大きさなどから、同様に想定していた。また、平成26年度に併せて調査した「市道千刈田向山線道路改良事業」範囲内において、洪武通宝６枚と不明であるが渡来銭１枚を含む銭貨が出土した３号土坑(『第647集平成26年度発掘調査報告書』内、墓壙として報告)が確認されている。これにより中世の遺構の存在が明らかとなり、これらを踏まえ、中世城館としての可能性が示唆された。室根地区周辺における中世の歴史的背景としては、昭和59年に試掘調査が行われた(調査機関不明)上折壁城や平成12年に旧室根村教育委員会によって一部調査が行われた浜横沢城、一関市指定史跡の金鶏城(下折壁城)など、中世城館が多数認知されている。いずれも史料に乏しく、城主も不明なものも多いが、地域的にはこの周辺一帯を治めていた「葛西氏」配下の一派と想定される。断片的に残る資料として、「仙台領古城書上」に「下折壁城」の城名が見られ、城主名として「千葉遠江」と記されており、下折壁千葉氏の居城であったと推測される。下折壁城は上述した金鶏城であり、本遺跡から気仙沼街道(現国道284号線)を挟んだ向かい側の小高い丘陵地にある。永禄11年(1568年)に下折壁城主千葉茂成と曽慶城主岩淵信時との間で争乱が起きる。どちらも葛西氏配下の家臣同士であったが、周辺は一時緊張状態にあったと考えられる。３号土坑の推定時期からはこの時代も含まれることから、こういった歴史背景や街道を挟んだ真向かいに立地する良好な地理的状況から、本遺跡を中世城館と想定する一因としていた。

しかし、調査が進行していく中において、中世城館と想定した場合、いくつかの疑問点があったため、専門的なご意見を伺うべく、平成28年度の調査終了時に盛岡市教育委員会の室野秀文氏にご協力をいただいた。室野氏の見解として、①郭として機能する平場が現状見えない、②堀状遺構に関して、堀跡にしては構造がしっかりしていない、③縄張りとして防御的な機能があまり認められず、構造的にも現状では城館との解釈は難しい、④堀跡としている遺構は、鉱物(主に砂鉄か)採取の土採りの溝跡ではないか、とのことであった。

①については、東側尾根部の南側や西側尾根部の中央には、やや平坦面が確認できるが、広い平場はない。また、調査の結果、建物跡や柱穴といった作事の痕跡は検出できなかった。

②・③については、１・２号堀状遺構は両尾根間に並行するが、蛇行する部分が見られたり、底面に高低差があったりと不規則さが目立つ。２・４号は調査区中央部に向かって収束するため、当初は虎口の可能性を考えたが、いずれも深さが徐々に浅くなっていき、最後はスロープ状になって消失しており、防御性が窺えない。また城館とした場合、前面となるのは気仙街道が通る北側にあたると思われるが、前述したとおり１・２・４号とも谷部中央で消失し、前面に設けられた遺構は確認できな

かった。３号堀状遺構については、尾根の縁辺に配置されているが、等高線と逆行する弧状をしており、４号堀状遺構と併せて半月状の小郭を形成しているように思えた。しかし、小規模の平場はあるが、ここから当該時期の遺構は検出されなかった。そのため、堀としての機能に疑問が残っていたが、前々章でも触れたとおり、趙哲済氏から段丘の縁辺の崩落によるスベリ痕跡ではないかとのご指摘を受けた。そうすると、ＳＶ04～07のある小範囲の平場は南側から連続する斜面であったものと考えられ、３号堀状遺構は、崩落（スベリ）により形成・埋没した自然地形の可能性が高い。

④については、他地域でも堀跡と見間違うほどの規模の鉱物採取の土採り跡があり、調査が行われた例がほとんどないため、詳細は明らかとなってはいないが、そういったものが該当するのではないかとご教授いただいた。室根地区では、昭和30年代まで地下鉱物の採掘が盛んに行われていたようである。近隣の気仙沼市や陸前高田市にも鉱山が点在しており、気仙地域の特色の一つでもある。室根地区においても、鉱山跡は数多くあり、旧室根村教委では鉱山跡及び関連施設の位置や関係者の聞き取り調査などを報告書にまとめている。津谷川地区鉱山跡や萩倉鉱山跡、東楽鉱山跡といった鉱山跡は金鉱山とされ、平泉藤原氏時代にまで遡る伝承を持つものも多い。また、近世には炯屋跡や鍛冶場といった名称を残す鉄関連遺跡も存在する。『津谷川村風土記御用書出』(1776)によると、村内全域が仙台藩の藏入地で、17世紀中頃には金山９か所があり、金山奉行代官所が設けられ、藩内屈指の産金を誇っていたが、元禄期以降は衰退の一途を辿る。代わって製鉄業が盛行し、砂鉄の採取や炯屋が各地で操業されたようである。これらが実際に調査が行われた例はないが、砂鉄を採取するために堰を造り、水を流して溜まった砂鉄を採取したとの伝承も記載されている。本遺跡周辺の基盤土層は、風化花崗岩（マサ土）で構成されており、マサ土には砂鉄を多く含むことが知られている。

これらを踏まえて、２・４号堀状遺構は、前述したように谷部の中央付近で消失するものの、連結するような位置関係となっている。４号についての詳細は、前々章で述べたが、現代まで遺跡北側にあった水田へと引水するための水路として利用していたようである。ただし、現代に新しく造設したかは不明であり、近世からの施設を後世まで使用していた可能性も考えられる。実際、遺構内や周辺から近世陶磁器が出土していることから、当該時期まで遡る遺構の可能性も否定できない。これを水路とした場合、４号から２号へと引水し、その水流を利用してマサ土から砂鉄を採取していたのではないだろうか。１・２号は南側の調査区外へと続くが、その先には大きな溜め池が存在する。現在は放置されており、その用途については不明だが、砂鉄採取時の比重選別をするための施設であったのではなかろうか。残念ながらこれらについて、本遺跡についての記録を残す史料はないが、今後、周辺調査が行われる際に、可能性のひとつとして提示しておく。

室根地区における本格的な遺跡調査は今回が初めてに等しいが、これら調査成果が周辺地域の歴史解明の一助となることを期待したい。最後に、３か年にも及ぶ調査にご協力いただいた地域の皆様に感謝を申し上げる。

引用・参考文献

【文献・論文】
室根村教育委員会　1996「室根の金山」　室根村文化財調査報告書第11集
盛岡大学文学部社会文化学科熊谷ゼミナール　2009「浮野遺跡第二次発掘調査概要報告書」
盛岡大学文学部社会文化学科熊谷ゼミナール　2010「浮野遺跡第三次発掘調査概要報告書」
(公財)岩手県埋文センター　2015「平成26年度発掘調査報告書」　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第647集

写　真　図　版

八幡沖遺跡周辺　空撮（S→）

東側尾根部・中央谷部　全景（SW→）

写真図版１　航空写真（１）

西側尾根部　全景（直上→）

中央谷部　現況

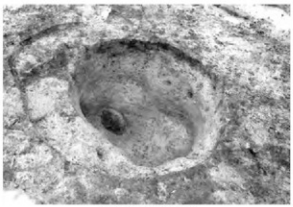
東側尾根部　現況

東側尾根部　現況

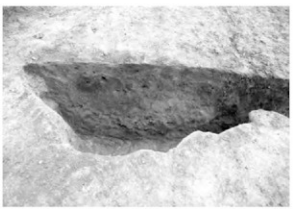
西側尾根部　現況

写真図版２　航空写真（２）、調査区現況

ＳＫ01　平面（ＮＷ→）

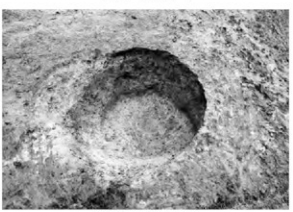


ＳＫ02　平面（Ｓ→）

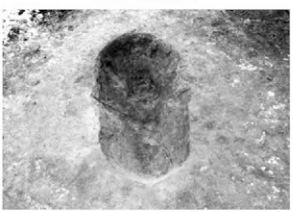


ＳＫ01　断面（Ｓ→）

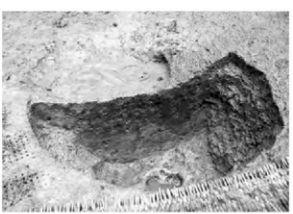
ＳＫ02　断面（ＳＷ→）



ＳＫ05　平面（ＮＥ→）



ＳＫ06　平面（Ｅ→）



ＳＫ05　断面（ＮＷ→）

ＳＫ06　断面（Ｅ→）

写真図版３　土坑（１）

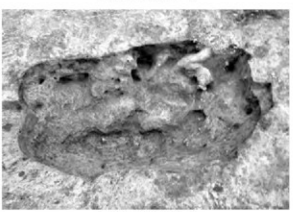
ＳＫ07　平面(Ｓ→)

ＳＫ08　平面(Ｓ→)

ＳＫ07　断面(Ｓ→)

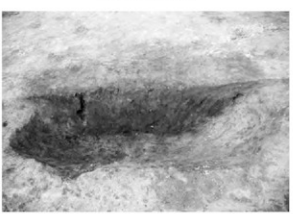
ＳＫ08　断面(Ｓ→)

ＳＫ10　平面(Ｅ→)



ＳＫ11　平面(Ｓ→)

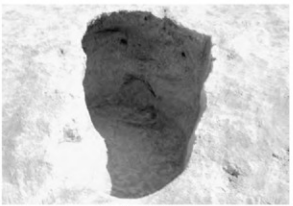
ＳＫ10　断面(Ｅ→)



ＳＫ11　断面(Ｓ→)

写真図版４　土坑(２)

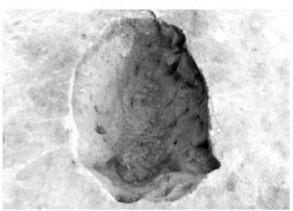
SK12　平面(SE→)



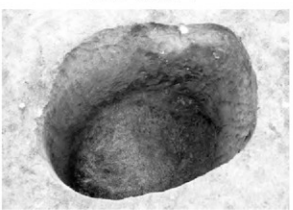
SK13　平面(W→)

SK12　断面(SE→)

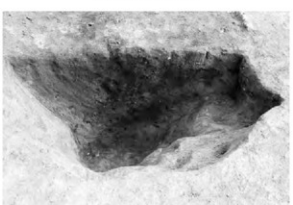
SK13　断面(SW→)



SK19　平面(NW→)



SK22　平面(SE→)



SK19　断面(NW→)

SK22　断面(SE→)

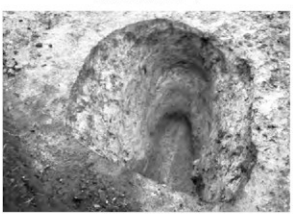
写真図版5　土坑(3)

ＳＫ26　平面（ＮＥ→）

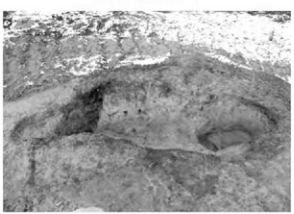
ＳＶ01　平面（ＳＥ→）

ＳＫ26　断面（ＮＥ→）

ＳＶ01　断面（ＳＥ→）



ＳＶ02　平面（ＳＥ→）



ＳＶ03　平面（Ｓ→）

ＳＶ02　断面（Ｎ→）

ＳＶ03　断面（ＳＷ→）

写真図版６　土坑（４）、陥し穴（１）

ＳＶ04　平面（ＳＥ→）

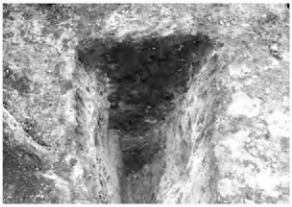
ＳＶ05　平面（ＳＥ→）

ＳＶ04　断面（ＳＥ→）

ＳＶ05　断面（ＳＥ→）

ＳＶ06　平面（ＳＥ→）

ＳＶ07　平面（ＳＥ→）



ＳＶ06　断面（ＳＥ→）

ＳＶ07　断面（ＳＥ→）

写真図版７　陥し穴（２）

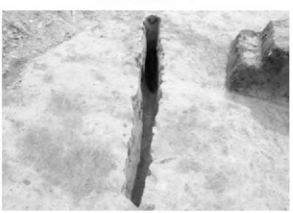
SV08　平面(E→)

SV09　平面(S→)

SV08　断面(E→)

SV09　断面(S→)

SV10　平面(W→)



SV11　平面(NW→)

SV10　断面(E→)

SV11　断面(NW→)

写真図版8　陥し穴(3)

SV12　平面(S→)

SV13　平面(NE→)

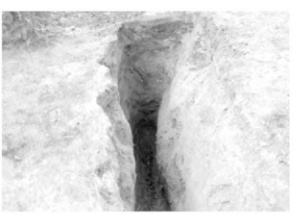
SV12　断面(S→)

SV13　断面(N→)

SV14　平面(W→)

SV15　平面(SE→)

SV14　断面(W→)

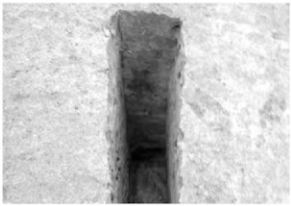


SV15　断面(SE→)

写真図版9　陥し穴(4)

ＳＶ16　平面（Ｎ→）

ＳＶ17　平面（Ｎ→）



ＳＶ16　断面（Ｓ→）

ＳＶ17　断面（Ｎ→）

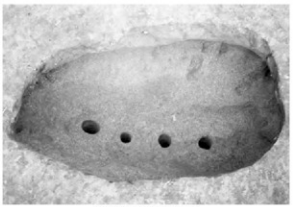
ＳＶ19　平面（ＮＷ→）

ＳＶ21　平面（ＮＥ→）

ＳＶ19　断面（ＮＷ→）

ＳＶ21　断面（ＮＥ→）

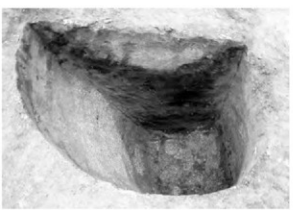
写真図版10　陥し穴（５）



ＳＶ22　平面（ＳＷ→）

ＳＶ23　平面（Ｎ→）

ＳＶ22　断面（ＳＷ→）

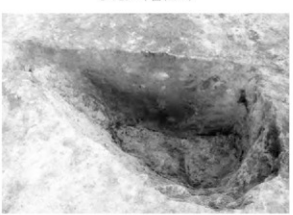


ＳＶ23　断面（Ｎ→）

ＳＶ24　平面（Ｎ→）

ＳＶ25　平面（Ｎ→）

ＳＶ24　断面（ＮＷ→）

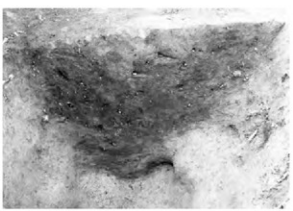


ＳＶ25　断面（Ｎ→）

写真図版11　陥し穴（６）

ＳＶ26　平面（Ｓ→）

ＳＶ27　平面（ＮＷ→）



ＳＶ26　断面（Ｓ→）

ＳＶ27　断面（ＮＷ→）

ＳＶ28　平面（Ｓ→）

ＳＶ29　平面（Ｅ→）

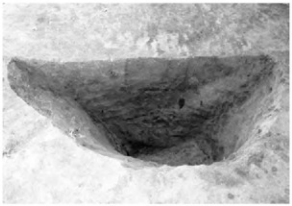
ＳＶ28　断面（ＳＥ→）

ＳＶ29　断面（Ｅ→）

写真図版12　陥し穴（７）

SV30　平面(N→)

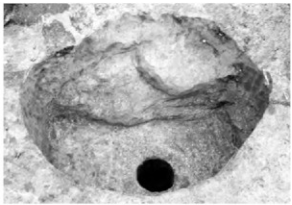
SV31　平面(N→)



SV30　断面(NW→)

SV31　断面(NW→)

SV32　平面(NW→)

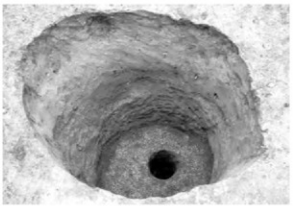


SV33　平面(SE→)

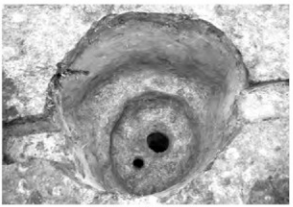
SV32　断面(NW→)

SV33　断面(SE→)

写真図版13　陥し穴(8)



SV34　平面（N→）



SV35　平面（NE→）

SV34　断面（NW→）

SV35　断面（N→）

SD01　平面（S→）

SD02　平面（N→）

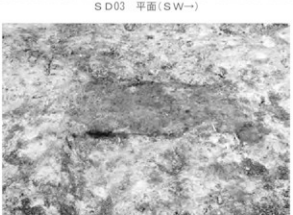
写真図版14　陥し穴（9）

SD01　断面（SW→）

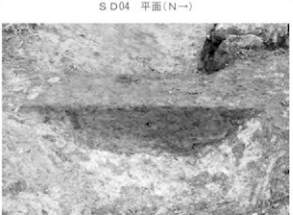
SD02　断面（N→）

SD03　平面（SW→）

SD04　平面（N→）



SD03　平面（SW→）



SD04　平面（NE→）

写真図版15　溝跡（1）

ＳＤ05　平面(Ｎ→)

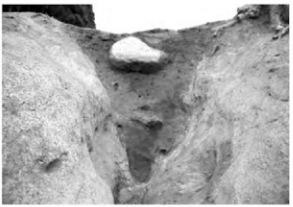
ＳＤ06　平面(Ｓ→)

ＳＤ08　平面(Ｎ→)

ＳＤ09　平面(Ｗ→)

写真図版16　溝跡(３)

ＳＤ08　断面（ＳＷ→）



ＳＤ09　断面（Ｗ→）

１号堀状遺構　断面（ＮＥ→）

１・２号堀状遺構　完掘（ＮＷ→）

１・２号堀状遺構　作業風景（Ｎ→）

写真図版17　溝跡（４）、堀状遺構（１）

2号堀状遺構　断面（ＮＥ→）

3号堀状遺構　完掘（Ｓ→）

写真図版18　堀状遺構（２）

3号堀状遺構　断面（ＳＥ→）

4号堀状遺構　完掘（Ｎ→）

写真図版19　堀状遺構（３）

4号堀状遺構　作業風景（S→）

4号堀状遺構　断面（S→）

写真図版20　堀状遺構（4）

4号堀状遺構　検出（ＳＥ→）

4号堀状遺構　検出（ＳＥ→）

4号堀状遺構　断面（Ｎ→）

4号堀状遺構　断面（ＳＥ→）

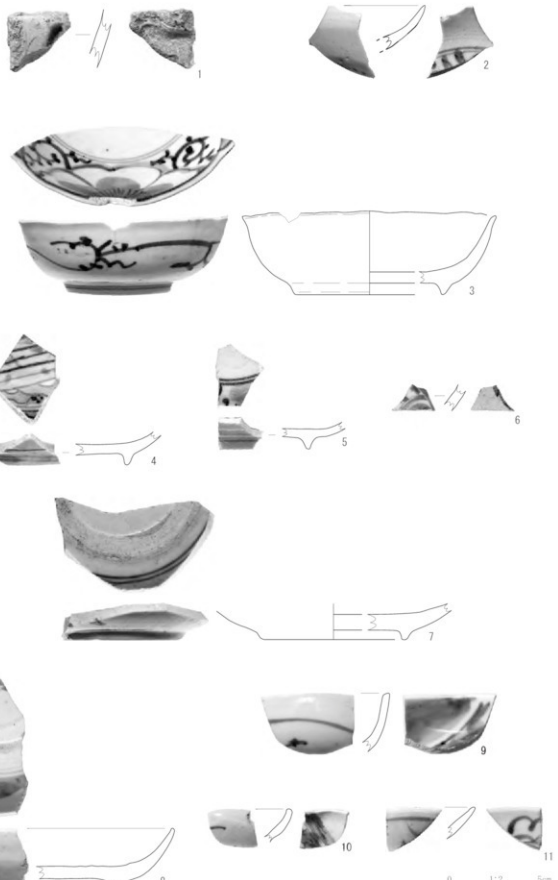
4号堀状遺構　断面（ＳＷ→）

4号堀状遺構　断面（ＳＥ→）

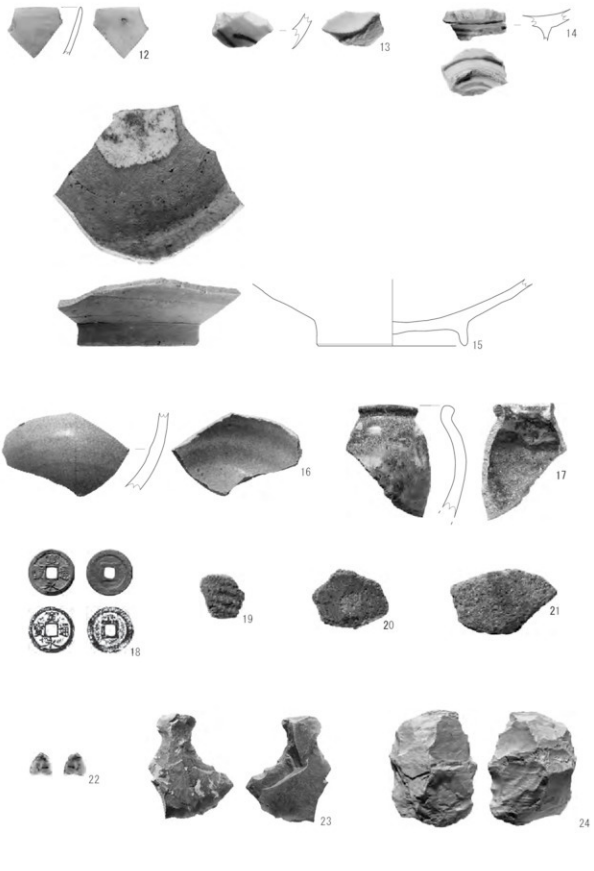
4号堀状遺構　断面（ＳＥ→）

4号堀状遺構　断面（Ｗ→）

写真図版21　堀状遺構（５）



写真図版22 出土遺物（１）



写真図版23　出土遺物（２）

写真図版24　出土遺物（３）

報告書抄録

ふりがな	はちまんおおいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	八幡沖遺跡発掘調査報告書
副書名	地域連携道路整備事業折壁地区室根バイパス関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第677集
編著者名	小林弘卓・杉沢昭太郎・鈴木貞行
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL(019)638-9001
発行年月日	2018年3月9日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
八幡沖遺跡	岩手県一関市室根町折壁字八幡沖・岡山地内	03209	NF93-1069	38度 55分 58秒	141度 26分 29秒	2014.09.16 ～12.19 2015.07.01 ～11.20 2016.06.01 ～08.03	14,873㎡	地域連携道路整備事業折壁地区室根バイパス関連発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八幡沖遺跡	狩猟場	縄文時代	陥し穴　33基	縄文土器、石器	
		中～近世	溝跡　8条 堀状遺構　4条	陶磁器、古銭(寛永通寶)	
		時期不明	土坑　13基		

要約

南から北へと張り出す細長い尾根に立地する遺跡である。尾根の頂部では、縄文時代は狩猟場として利用されており、円形・溝状といった形状の陥し穴が確認された。中～近世には、尾根と尾根の合間に堀状の溝を掘削し、鉱物資源採取のための土採りを行ったものと推測される。また、これらには、山土からの水脈を利用していた可能性が考えられる。これらは、現代まで用途を変え使用されており、遺跡下にあった水田等への配水として近年まで使用されていたようである。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第677集

八幡沖遺跡発掘調査報告書

地域連携道路整備事業折壁地区宝根バイパス関連遺跡発掘調査

印刷　平成30年３月２日
発行　平成30年３月９日

編集　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話　(019)638-9001
発行　岩手県県南広域振興局土木部一関土木センター
〒021-8503　岩手県一関市竹山町７番５号
電話　(0191)26-1418
(公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023　岩手県盛岡市内丸13番１号
電話　(019)654-2235
印刷　株式会社五六堂印刷
〒020-0021　岩手県盛岡市中央通三丁目16-15
電話　(019)654-5610

©(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2018